

熊本県文化財調査報告 第九集

石川山古墳群発掘調査
前島貝塚発掘調査

熊本県教育委員会

昭和四十三年三月

熊本県文化財調査報告 第九集

石川山古墳群発掘調査
前島貝塚発掘調査

熊本県教育委員会

序

開発工事にともなう文化財保護問題は現在の社会がもつ大きな課題の一つである。

石川山古墳群は果樹園造成工事により、前島貝塚は天草架橋にともなう建設工事により現状保存が困難となつた遺跡である。

昭和四十一年、熊本県は国庫補助を受け、これら遺跡の記録保存のため緊急発掘調査を実施したが、本書はその調査報告である。

両調査ともに炎天下の作業であつたため関係者の苦労は筆舌に尽くし難いものがあった。また、発掘後の整理についても、あいつぐ開発事業にともなう文化財調査に追われ、極めて不利な状況にあつたにもかかわらず調査を終了することができたのは、調査員各位をはじめ、関係機関並びに地元関係者の絶大な協力と文化財に対する深い情熱のたまものと厚く感謝する次第である。

なお、本書の刊行に当たり、御多忙の中に執筆いただいた各位に対し、深甚なる謝辞を呈するものである。

昭和四十三年三月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第九集

目 次

序

石川山古墳群

前島貝塚

梅殿塚古墳



石川山を西方よりのぞむ（中央の山地）

第 1 号 墳

—東方より—



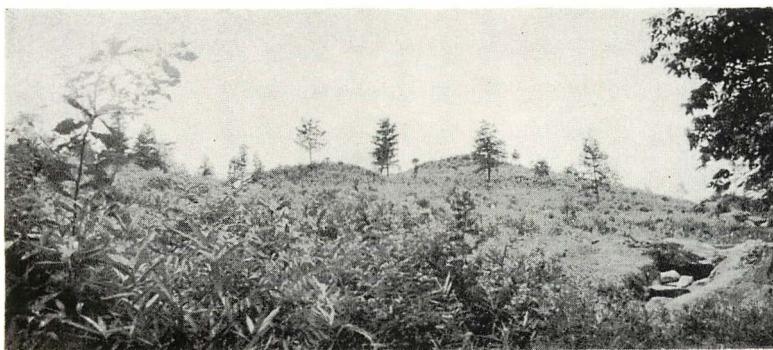
第 3 号 墳



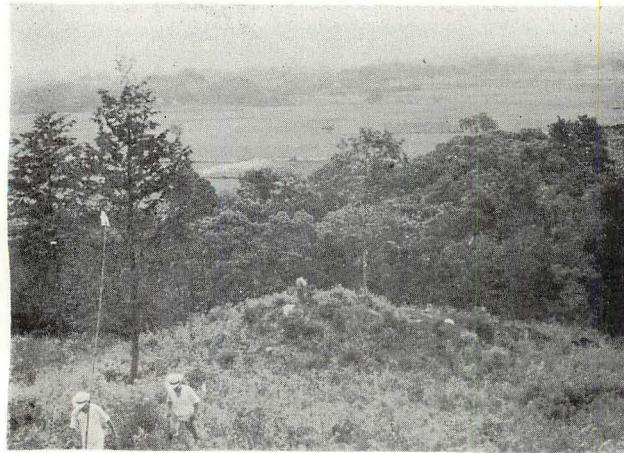
第 2 号 墳



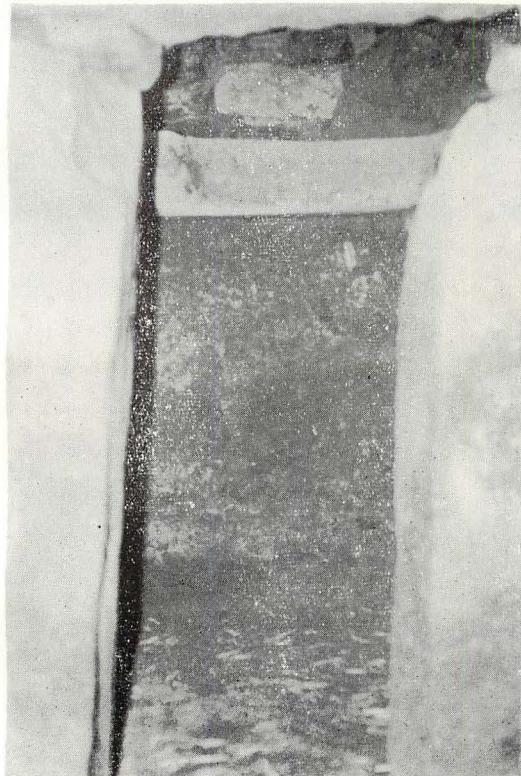
（東南方より）



← 第 5 号 墳



← 第4号墳
(西方より)



← 第4号墳石室
奥羨門の袖石の間より玄室奥壁と石屋形
の屋根が見える



↑
第3号墳石室
(玄室奥壁と石屋形)

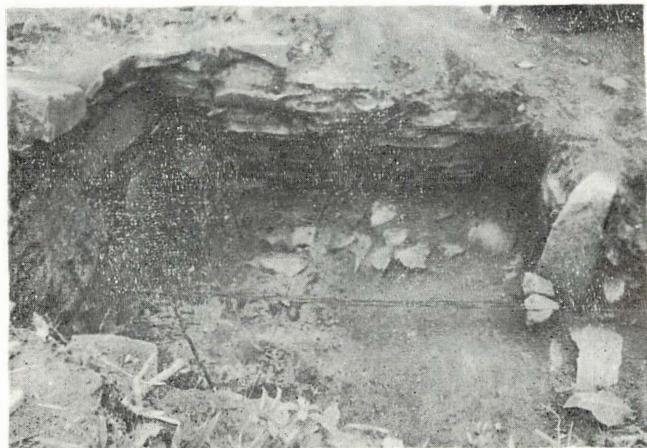
第4号墳石室——
羨門部を南方よりう
つす。
前面の折れた石材下
面に装飾文様の陰刻
がある。

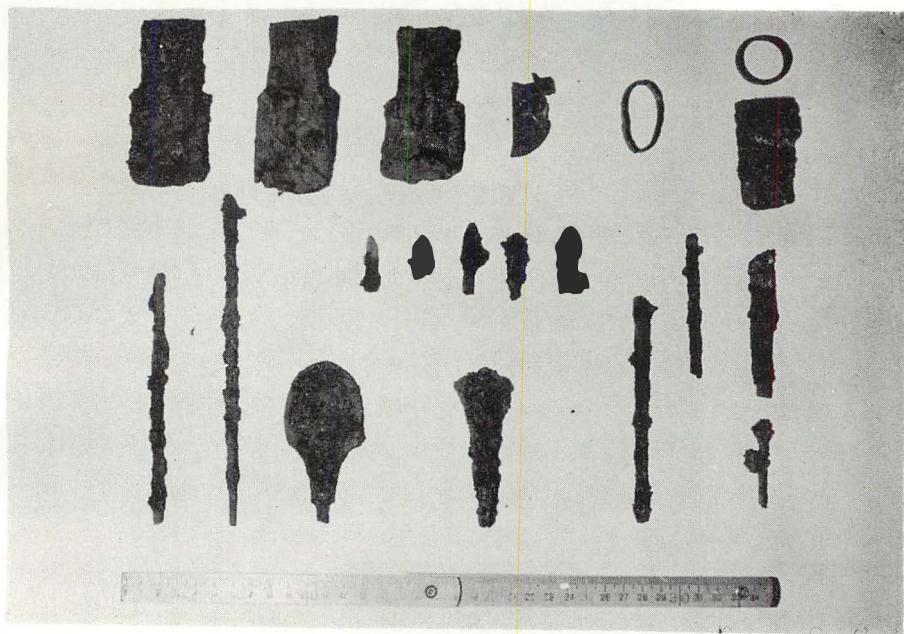


←第5号墳石室
前室より奥室を見る。



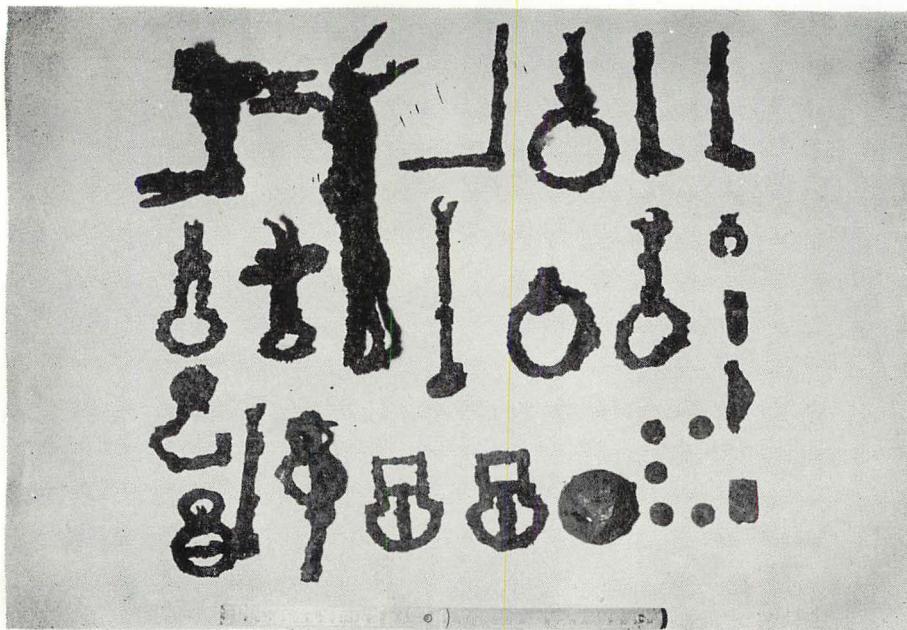
第6号墳石室——
(西方より)

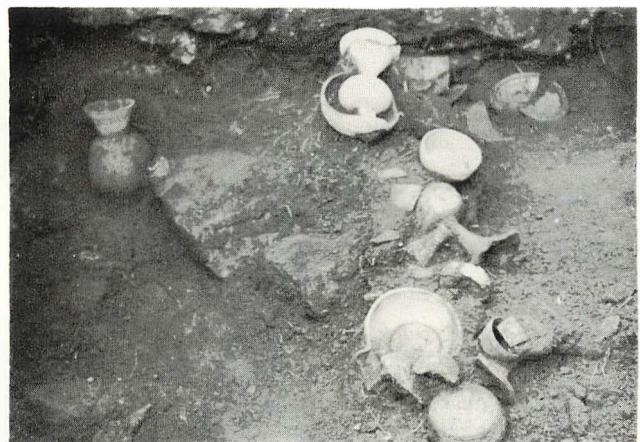




第4号墳出土遺物

(上は工具・武器類、下は馬具類)

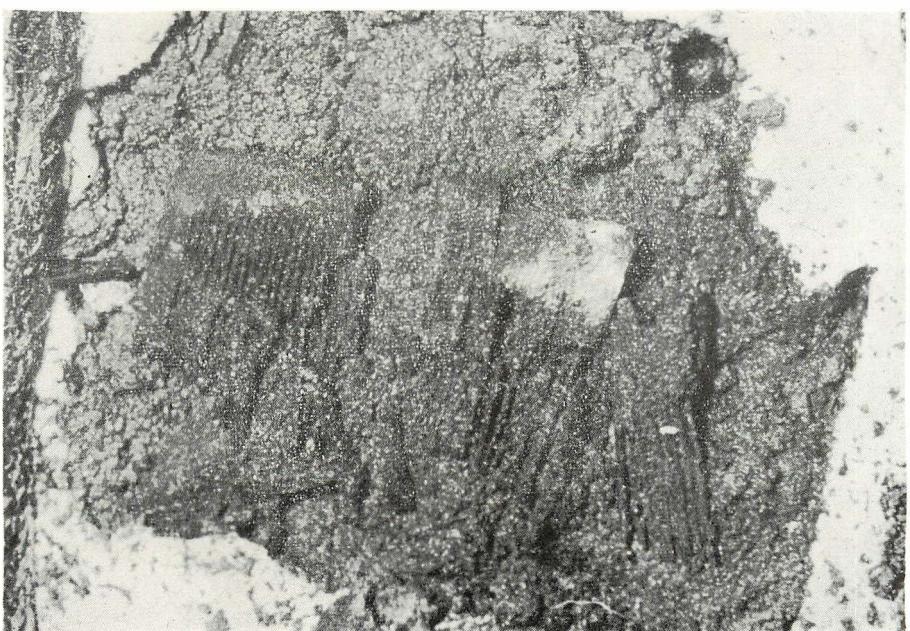
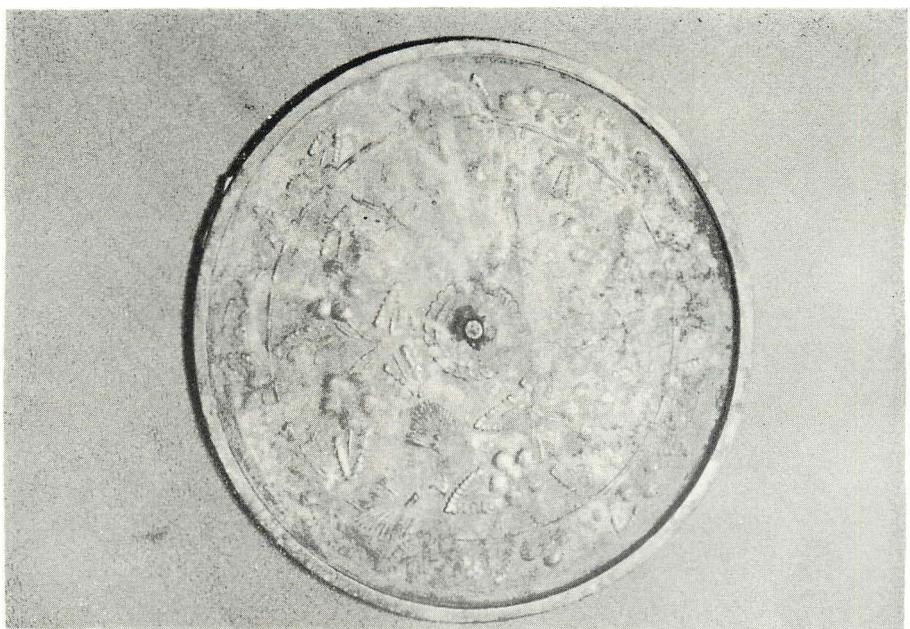




第4号墳遺物出土状況と須恵器



第5号墳出土・土師器・磁器・瓦器



第5号墳出土、鏡と櫛

石川山古墳群調査報告

はしがき

この調査の対象となつた石川山は、今まで石川部落の入会地として使用されていたが、昭和四一年三月、他に売却されることになった。買主は農業構造改善事業法による果樹園造成を計画し全山の樹木を伐採したところ、従来知られていた二基の古墳のほかに新たに七基の古墳が発見された。県教育委員会では直ちに現地を調査し、地もとの植木町教育委員会および石川部落代表者と折衝を重ねたが古墳群の現状保存が困難なため熊本県教育委員会の主催で緊急調査を実施することになった。調査は昭和四一年七月二一日から七月三〇日にかけて行なわれ、幸い連日の快晴に恵まれて予期の成果をあげることができた。

調査に当つては標記の六名が調査員として参加した。県立第二高等学校および県立山鹿高等学校の考古学部員の諸君が補助員として測量、発掘の労力面を担当して焼けるような炎熱を克服して努力していただいた。熊本県教育委員会社会教育課においては、課の総力をあげて連日調査に参加し、煩瑣な庶務一切を担当された。また地もとの植木町教育委員会・植木町役場からも万全の御協力をうけた。ことに植木町役場相良武氏は古墳群立地地形の測量に連日御努力いただいた。

この報告書をまとめるにあたつては、「はしがき」「地形と環境」を原口長之、「遺跡と遺物」のうち「第一・第二号墳」を田辺哲夫、「第三

桑 緒 平 隈 原 田

原 方 岡 口 辺

憲 勝 昭 長 哲

彰 勉 昭 志 之 夫

石川山古墳群調査報告

号墳」を原口、「第四号墳」限昭志・原口、「第五号墳」平岡勝昭、「第六号墳」桑原憲彰、「第七・八・九号墳」緒方勉、「結び」原口。調査日誌は各調査員によって記録せられたものを原口が摘記した。その他石室構築に使用した石材の鑑定については古家修氏をわざらわした。採集した主として中世の人骨は熊本大学医学部解剖学教室におさめられ、後日その研究結果が発表される予定である。

この調査が完了し、この報告書ができあがるまでには以上のような各方面からの温かい御協力と御援助があった。改めて心からなるお礼を申上げる次第である。(原口長之)

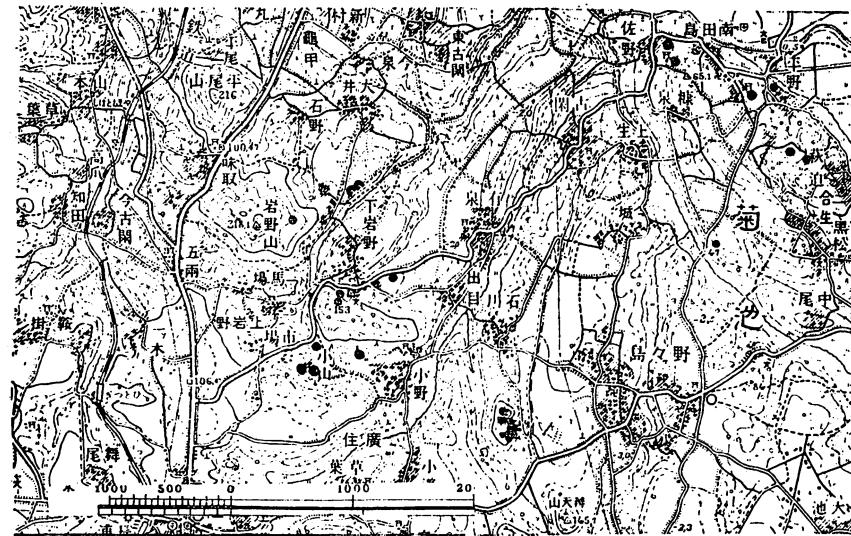
地形と環境

〔一〕位置

熊本県鹿本郡植木町大字石川字塚前九七番地(所有者 植木町石川区代表 吉岡光儀)「一一二五〇〇〇 熊本七号高瀬の二 うえき」図幅において図幅の東端より一一・六糎。北端より七・六糎のところに一一・七四糎の小丘阜がある。この図根点の北方、図上約〇・六糎に標高一一五糎の小丘阜がある。

この二つの小丘阜を中心とする山地を俗に石川山とよび、この山地に九基の古墳が点在する。このうちの一基は早くから知られていたが、のこりの七基は昭和四一年三月発見されたものである。これが石川山古墳群である。

〔二〕地形と文化的環境



第1図 石川山付近の地形と古墳の分布(図中の・印は古墳を示す)

阿蘇火山外輪山の西麓に統いて展開する一帯の台地を肥後台地とよび、肥後台地の主体部をなすのが合志原・黒石原地域である。大体において一〇〇米ないし三、四〇米の標高を持つ火山性の洪積台地であるが、この台地面に飯高山(一二二八

米）・群山（一四五、四米）・弁天山（一四、七米）・岩野山（二一八、一米）などの小丘群が飛び石のように散在する。これらの小丘群の一つが石川山やそれに隣りする横山である。

石川山の山頂に立つて東方をのぞむと標高八五メートルの平坦な畠地がはるばるとひらけ、畠地のはてに野々島の大集落が位置し、視界のはてに阿蘇火山脈の山肌が青くつらなつていて。石川山の西方は開析されて浅くて広い谷となり、古来小野小町の生誕地と附会された「小野の泉水」と呼ぶ大湧水池がありその縁辺に水田が発達する。

平坦な台地面に隆然とそびえるこの山は古代豪族の奥津城にふさわしく、周辺から仰ぎ見られる趣があり古くから靈山視せられていたようである。

この地方一帯は豊かな古代文化の集積地である。石川山古墳群のある植木町及びその隣接町村における埋蔵文化財の遺跡数を示すと、植木町で一二個所、鹿央町で二一、泗水町五三、西合志村二八を数える。^① このなかで古墳の分布をしらべてみると古墳は次の五グループに大別することができる。

① 石川山古墳群

② 横山の古墳群 横山の中腹にある円墳で横穴式複室巨石墳の「おにのいわや」古墳をはじめとする円墳群で確認されているのが五基ある。このほか四基あまりあるといわれる。

③ 西合志村合生の古墳群 県下屈指の壮大な墳丘をもつ円墳、濡れ觀音古墳とその近くに散在する大小十基の円墳を含む。

④ 泗水町田島の古墳群 鬼塚。ちよう塚など九基の円墳がある。近接する久米若宮古墳^②から方格規矩文鏡を出している。

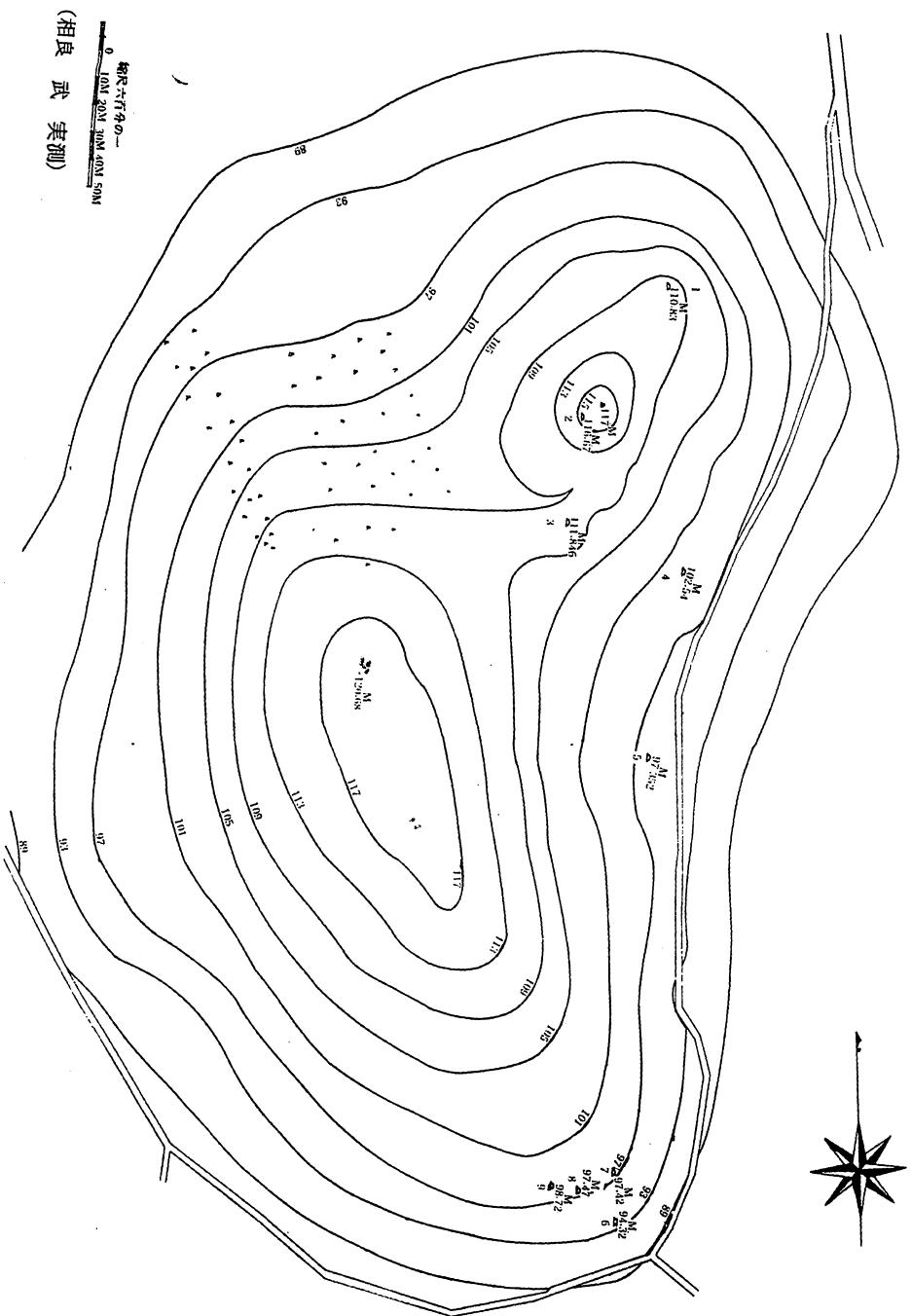
⑤ 植木町丸山の古墳群 七つ塚、さざ塚などもとは十数基あつたと伝える。玄蕃塚。立山横穴群、宮穴横穴群なども一連のものとして考えることができる。

以上の古墳は泗水町田島の古墳群の一部が古い時代に調査されただけでその他はほとんど調査されていない。従つて各古墳群相互の編年的関係や各群中における各古墳の位置づけ、それらの背後に想定される社会構造などのことはわからない。（原口長之）

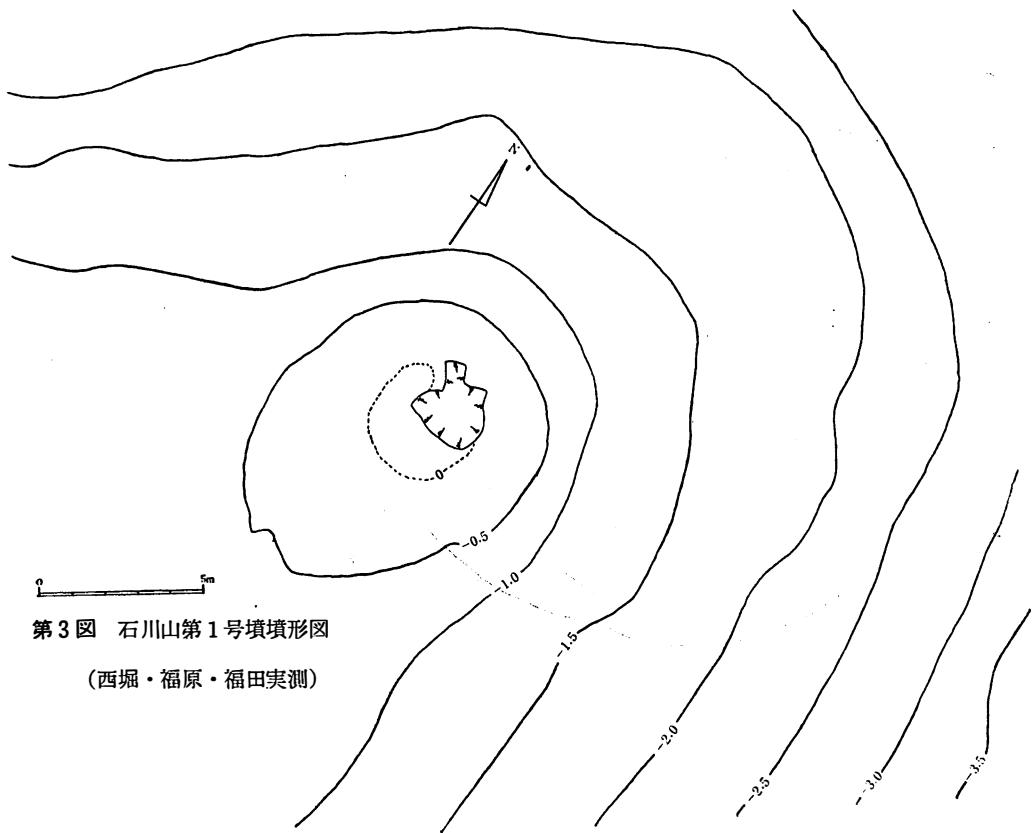
遺 跡 と 遺 物

〔1〕 古墳の呼称と調査した古墳

第2図 石川山古墳群実測平面図



(相良 武 実測)



第3図 石川山第1号墳墳形図

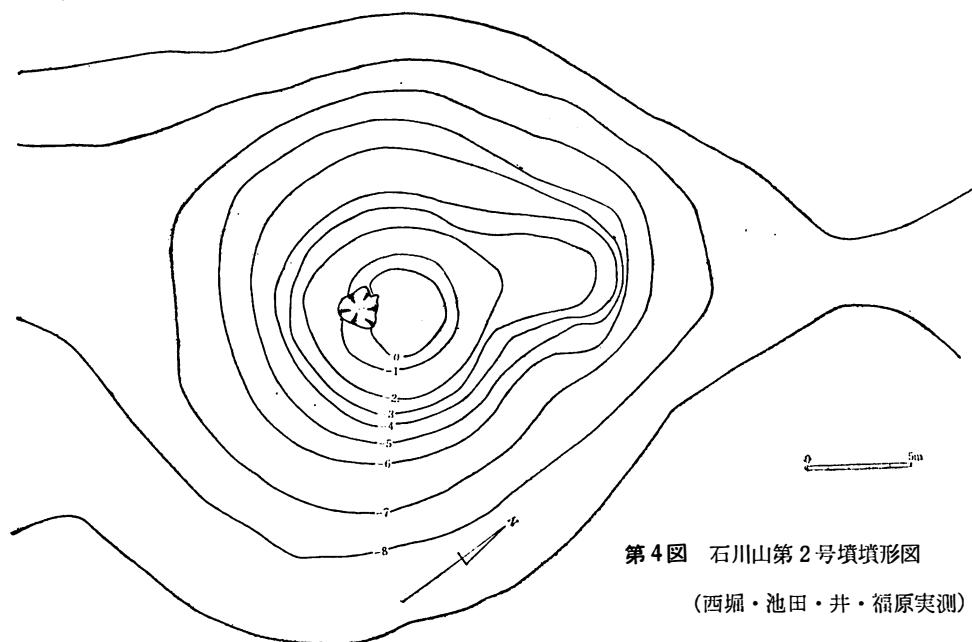
(西堀・福原・福田実測)

石川山の丘陵上に散在する九基の古墳については総括して石川山古墳群と称し、各個の古墳をば第二図に数字をもつて示したようによぶことにした。

調査後の処置について県教育委員会が植木町教育委員会、石川区代表者と折衝の結果、山頂部にある第一、第二、第三号墳は現状のまま存置し、第四、第五号墳は調査の結果必要であれば石室の部分を残すことになった。第六、第七、第八、第九号墳は本来円墳であったと思われるが、第六号墳に多少の封土を残すほかは破損もしくは消滅に近い状態であって開墾も止むを得ないということになった。従つて今回の調査は第三号墳以下の諸墳について実施することにし、余力があれば第一、第二号墳の墳形図を作製することになった。存置可能の第三号墳を調査対象に加えたのは、この古墳が既に天井石の一部を失ない、そこから自由に石室に入れる状態であり、このまま放置すれば開墾作業などに関連して破壊が進むおそれがあると考えられるので調査記録する必要を感じたためである。

(2) 第一号墳（第三図）

石川山の稜線の北端、標高一〇〇・八三米に立地する円墳である。直径九米、高さ五〇厘米の小規模なものであるが稜線上に立地するので遠くから古墳の存在がすぐ認められるほど大きい見かけをもっている。中央部が約三〇厘米の深さに陥没している。盜掘をうけたあとであろう。丹彩の残存する石材が四個発



第4図 石川山第2号墳墳形図

(西堀・池田・井・福原実測)

見された。封土の高さからいって石室の存在は考えられないので、この石材は古墳の主体をなす石棺の破片であろうと思われる。石棺が家形か箱式か明瞭でないが石材破片の厚みから言えば箱式石棺らしく見える。封土を盛るというよりも寧ろ、石棺を埋葬して土をかぶせたのが円墳状を呈したというのが妥当かも知れない。本古墳群で最も古く編年されるものであろう。（田辺哲夫）

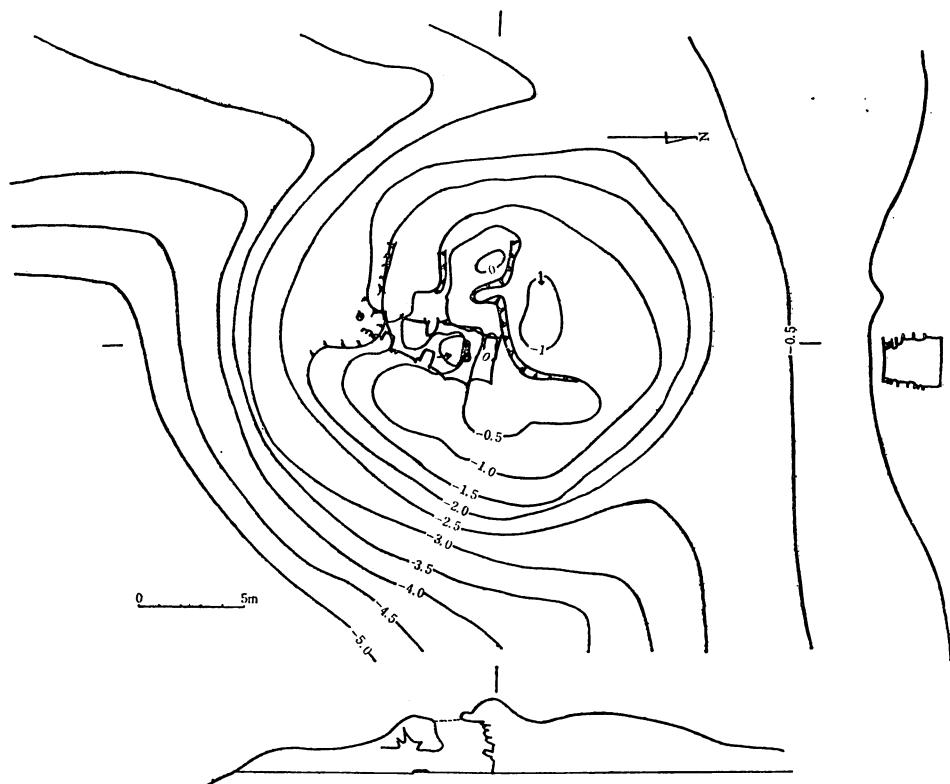
(3) 第二号墳（第四図）

山の稜線上に築造された小規模な前方後円墳である。長軸の方向は北二七度東。墳丘の長さ三四米、後円部の直径二三米、前方部の幅は明瞭でないが推定十米。高さは後円部で四米、前方部で二米。埴輪、葺石、周濠、表飾の石造物などはない。

前方部が未発達でいわゆる帆立貝式又は柄鏡式古墳と称せられる形態に近い。

未発掘で内部主体は不明だが墳丘の高さからみて横穴式石室の存在は考えられない。堅穴式石室か石棺類であろう。

我が國発生期の古墳の第一の特色が自然の地形をきわめてよく利用することにあることは一般に認容されるところである。この古墳のように丘陵地形をそのまま古墳立地の基盤として利用し、少ない盛土であるにもかかわらず、低地帯からの見かけの上で古墳の存在をくつきりときわだたせるやриかたは古式古墳の典型的な姿相を示していると言えよう。上田舒氏によると近畿地方の古式古墳における後円部の長さと前方部の長さの比は六・四を示すというが、本古墳のそれが一二メートル・一四メートル、即ち六・三・八を示すことは興味深い。（田辺哲夫）



第5図 石川山第3号墳 墳形図
(西堀・池田・福原実測)

(3) 第三号墳

墳形（第五図） 背斜部稜線上に築造され封土の高さ五米、封土の基底面における直径二八メートルの円墳である。葺石、埴輪、石人などの施設は発見されなかつた。周濠のあともない。稜線上より望めば非常に壮大なる古墳に見える。

石室（第六図） 変成岩の巨石を主とし一部に安山岩を交えて構築した横穴式複室墳で主軸の方向は北一八度東、南側に開口する。羨道・中羨門・前室・奥羨門・玄室に区分される。主軸の長さは基底部において玄室奥壁＝石屋形内壁より羨道の前端まで六米九〇糢を計る。

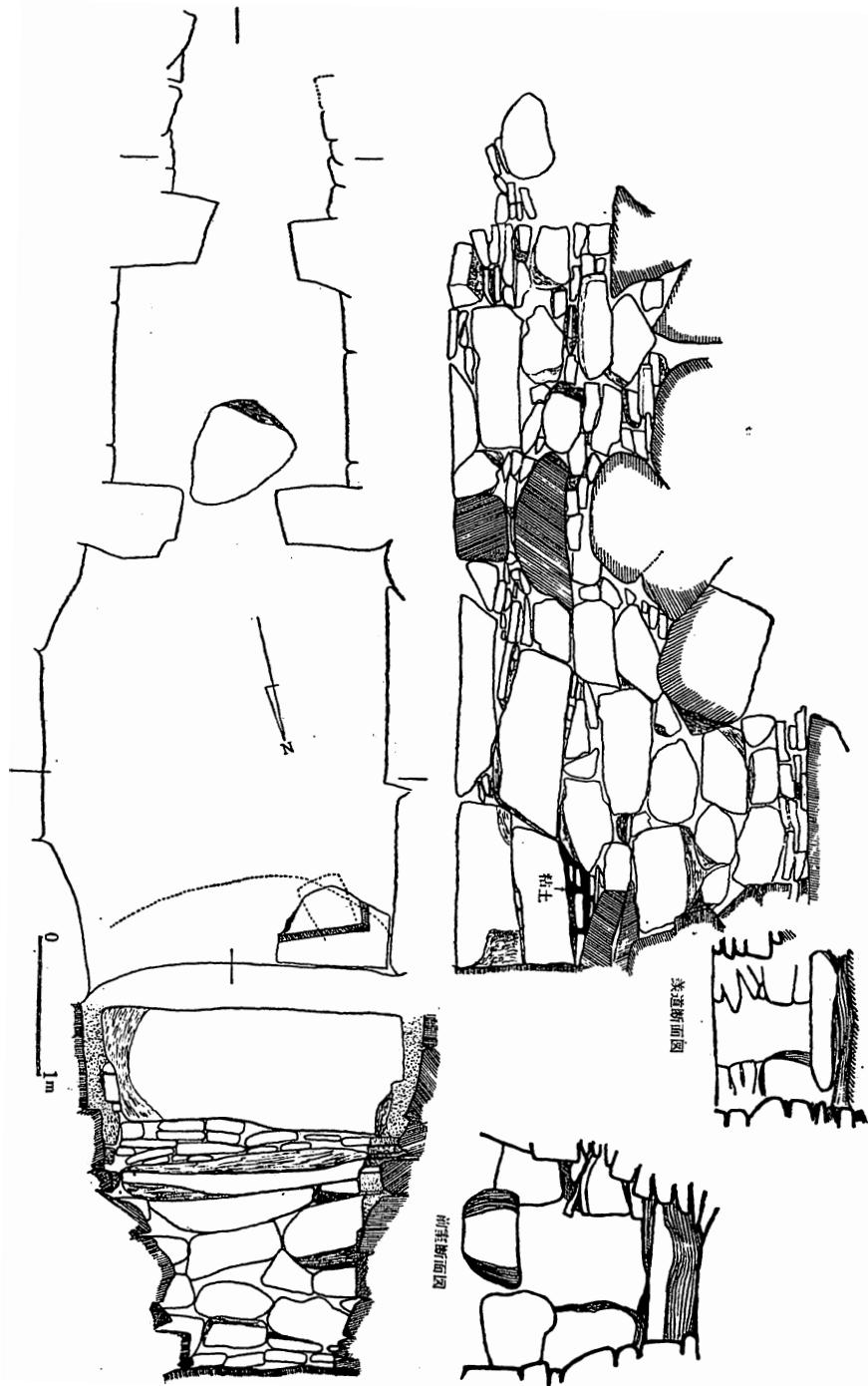
玄室の間口は北壁の部分で二米二一糢、奥行は主軸上で二米九六糢の矩形をしている。奥壁ぞいに石屋形がつくりこんである。但し石屋形とは言つても極めて粗雑なもので奥壁と両側壁にかけて一枚の安山岩の板石を架して石屋形築造の意図を示しただけのものにすぎない。玄室内に突き出た屋根の奥行は主軸上で五六糢、東端で三四糢、西端で三六糢で屋根としても整つていなない。床面より天井までの高さは二米六

註①熊本県教育委員会「熊本県埋蔵文化財地名表、昭和三七年度」

全「熊本県新産業都市指定地区、遺跡地名表、追加及び工事関係分、昭和四〇年」

②「熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告、第二冊」所収
③上田哲「前方後円墳の型式学的研究の方法論をめぐって」古代
学研究19所収

第6図 石川山第3号墳石室図(原口長之)



四種。既に古く開口し完全に荒らされていて床面構築の状態はわからない。玄室内に残存していた凝灰岩の板石の破片に浅いくりこみがあるのを遺骸を寝せるためのベッドではないかと思い、玄室北東隅の床面に据えてみたところ大体において適合する。石屋形の下にくくりこみをもつ屍床があったものと考えて差支えない。

前室の奥行は主軸上で一米六五種、間口は北壁沿いに一米七〇種でいびつではあるが正方形を基本形とする。床面より天井までの高さは一米八〇種で玄室より約八〇種低い。床面構築の状態は玄室と同じくわからない。奥美門に接して七〇種×七〇種×四〇種の塊石があるのは玄室の天井部が陥落したものをその後の盗掘のとき前室内に移したものであろう。

玄室・前室における側壁構築の手法は、床面に巨大な板石を立て腰とし、その上部に不規則な塊石又は切石をゆるやかに持送りにつみあげ天井部がやや縮約したところで一枚の巨石をもってふさぎ天井とする。従ってその断面はゆるやかな梯形状を呈する。

美道の奥行は主軸上で一米四二種、間口は中美門を離れるに従って僅かにせまくなる。中美門沿いに一米、美道前端で九〇種、美道の西側壁は失なわれているが本来は東側壁に対応するものがあったと思われる。天井はない。

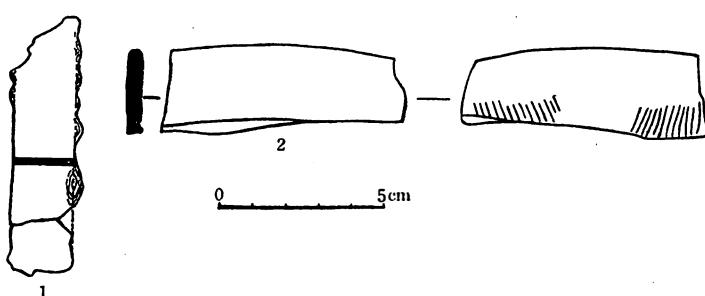
遺物（第七図） 上述のように盗掘を受け荒廃にまかせられていたため遺物のみるべきものはない。僅かに鉄片一個、青磁片一個を玄室床面より発見したにすぎない。

鉄片①長さ七・八種、幅二種、厚さ〇・二種の板状の鉄片で飾金具の破片であろう。鍍金があったものかどうかわからない。

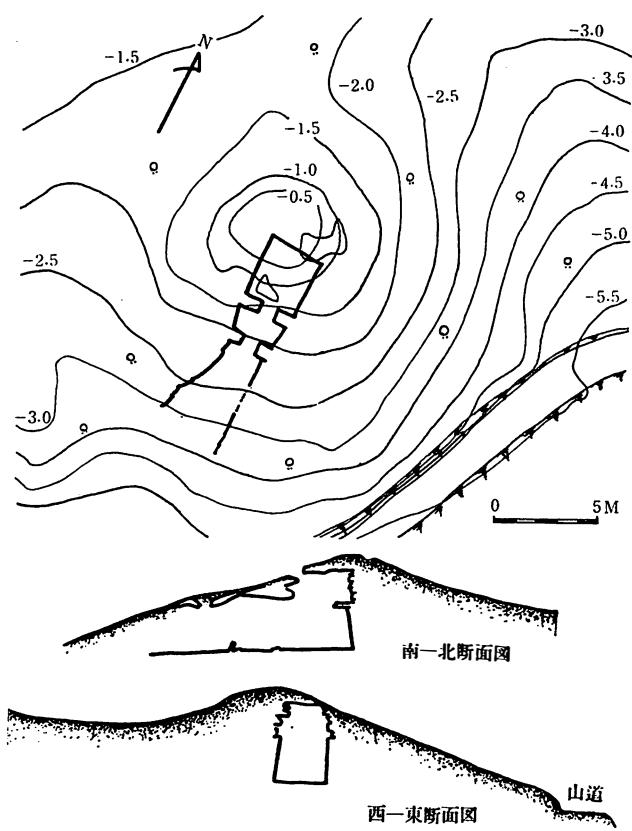
青磁片②長さ六・八種、幅約二・六種、厚さ〇・五種の口縁部破片で黄土色の表面に引摺いたような細線がある。後世の混入であろう。（原口長之）

(4) 第四号墳

墳形（第八図） 石川山の丘陵の東斜面を利用して封土を盛った円墳であるが、かなり封土が流出しているため正確な数値はつかめない。玄室の床面から天井石の上面までの高さが約四米であるので、それから推測すると墳丘の高さは約四米五〇種程度と考えられる。もし四米五〇種とした場合、



第7図 石川山第3号写墳出土品（原口長之）



第8図 石川山第4号墳墳形図(隈昭志)

それを現在の地形によつてみると復原した直径は約二二~二五米ほどにならう。現状からみた墳丘と石室の位置的関係は、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中央にかかる状態で石室を設け、そこから主軸を南に向けている。

石室(第九図) 古墳の形式は平面の形状が方形に近い玄室と前室、それに羨道をもつ、入口をほぼ南に向けた全長約一〇米六〇糢の横穴式複室墳である。

玄室は奥行約三米一〇糢、巾約二米五三糢のほぼ長方形を呈し、両側壁と奥壁にそれぞれ一枚の凝灰岩の板石を用いて石室を造っている。玄室の内部にはさらに奥壁から約一米二糢のところに袖石を立て、その上に蓋石をのせた造り付けの石屋形を備えている。蓋石は約一米二〇糢×二米八七糢、厚さ約三一糢の一枚石で一部を破損しており、その部分には利器でもつて打欠いた痕跡が明瞭に認められるので、おそらく古墳築造後に破壊されたものと思われる。破壊された部分の破片の一部とみられるものが床面上に散乱していたことはかなり古い時期の破壊であることを意味し、共伴する検出遺物から考えて糸切底の時期墳と推測して大過あるまい。また石屋形の袖石は左右対称に造られ、床面より約五〇糢のところで内弯して美しく調整されている。そのほか奥壁には一面に白色の顔料を塗った痕跡があるし、石屋形の袖石の前面にも同じ白色の顔料でもつて塗られているが、图形化されたものかはつきりしない。玄室の側壁の状態は床面から二米一〇糢までが一枚の凝灰岩の板石を用い、その上部は片岩を持ち送り式に積み上げた上に一枚の天井石を載せたものである。前室との間には厚さ五五糢と六八糢の界石を設けている。

前室は方形に近い形状を呈し、長さ一米一二糢、巾玄室側で二米三三糢、前方部がわずかにせまく一米九糢の大きさである。両側壁にはそれ

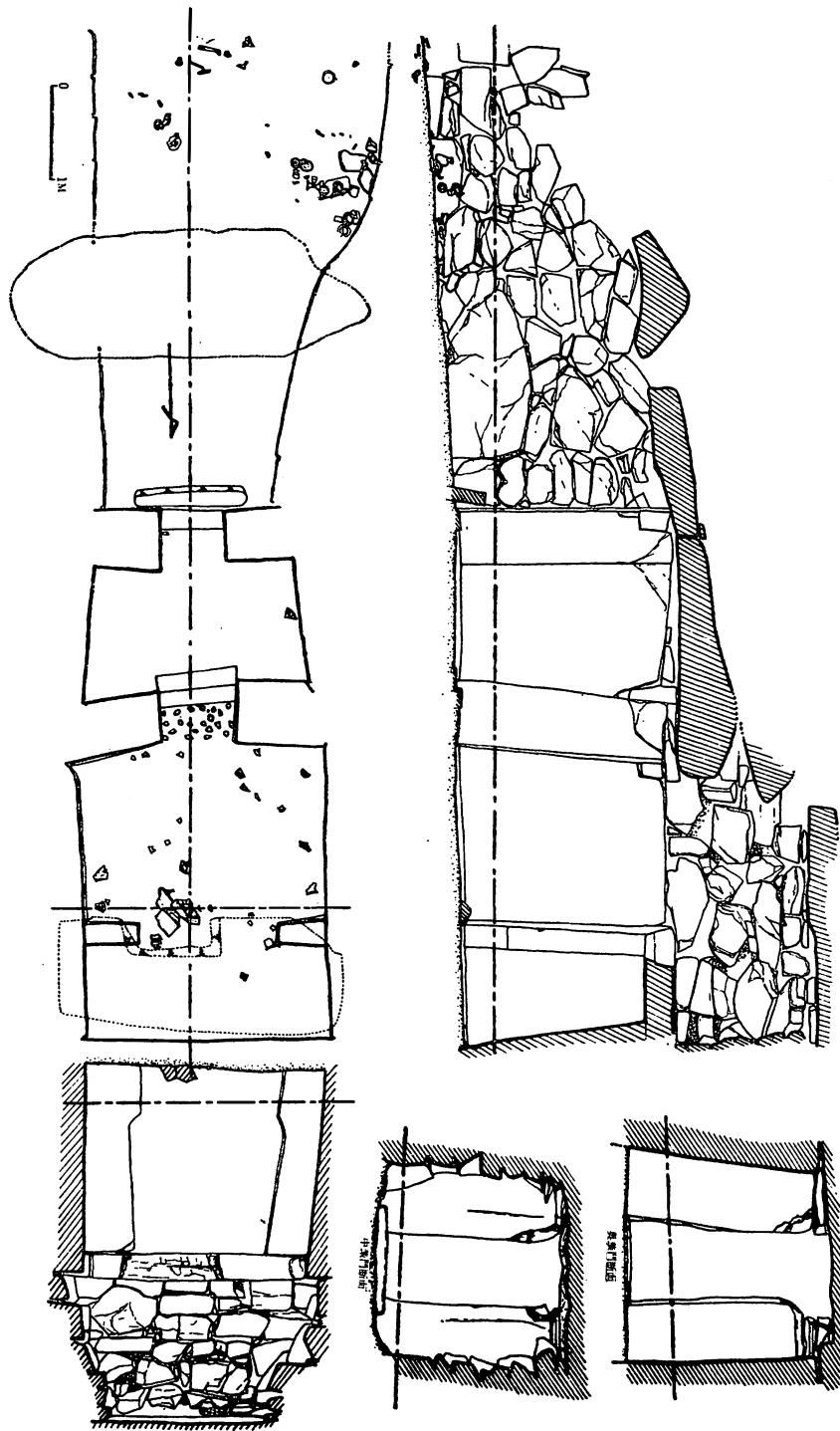
それを現在の地形によつてみると復原した直径は約二二~二五糢ほどにならう。現状からみた墳丘と石室の位置的関係は、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中央にかかる状態で石室を設け、そこから主軸を南に向けている。

石室(第九図) 古墳の形式は平面の形状が方形に

近い玄室と前室、それに羨道をもつ、入口をほぼ南に向けた全長約一〇米六〇糢の横穴式複室墳である。

玄室は奥行約三米一〇糢、巾約二米五三糢のほぼ長

方形を呈し、両側壁と奥壁にそれぞれ一枚の凝灰岩の板石を用いて石室を造っている。玄室の内部にはさらに奥壁から約一米二糢のところに袖石を立て、その上に蓋石をのせた造り付けの石屋形を備えている。蓋石は約一米二〇糢×二米八七糢、厚さ約三一糢の一枚石で一部を破損しており、その部分には利器でもつて打欠いた痕跡が明瞭に認められるので、おそらく古墳築



第9図 石川山第4号墳石室図(昭吉)

それ一枚の凝灰岩をもつてて、天井石は奥羨門と中羨門にかかるようにして載せている。床面から天井までは約一米三五纏の高さである。

奥羨門と中羨門にはそれぞれ内側に切り込みが認められる。奥羨門では床面から約一米八三纏の高さで、袖石内側の中央部に約二四纏の巾で設けている。中羨門の場合は床面より約一米九三纏のところで両袖石の前方部から切り込みをつけている。これらの切り込みは左右対称に設けてあり、羨門を閉ざすために施した施設ではないかと推測する。しかし実際には奥羨門、中羨門ともに蓋石がないのではつきりしない。ただ中羨門には蓋石の一部とみられる凝灰岩の板石（巾一米一六纏、高さ三二纏、厚さ一五纏）が残存しており、閉鎖するための何らかの施設と推測できそうである。その場合、切り込みに渡された物が石であったのか、あるいは木材であったのかは不明である。

羨道は完掘することができなかつたので数値がはつきりしないが、現長は約五米二纏である。巾は中羨門側で約一米七五纏あり、そこから外部に向うにしたがつて西壁側がいちじるしく広がつてゐる。とくに中羨門から約一米五三纏まではラッパ状に開き、それより外側は逆に内彎ぎみに広がつてゐる。羨道部でとくに遺物の検出がいちじるしく多かつた個所はその内彎した部分から外部に向つてのところである。羨道部の両側壁は片岩を比較的粗雑に積みあげて天井に至る。床面から天井までの高さは中羨門のところで約二米二五纏あり、そこから外部に向けてわずかに下降している。現存している天井の最前部のものは断面が三角形に近い形状を呈し、途中で半折している。この天井石は安山岩を用いており、その上面および裏面には線刻の絵画が描かれている。この絵画の詳細については別項にゆずることにする。

この絵画のある天井より外部には現在天井がないので、これより外部の状態については不明である。しかし線刻絵画のある天井石のちょうど下の部分が羨道部の両壁におけるラッパ状の広がりから内彎への変換点であることには何か特別の意味があるのかかもしれない。つまりその変換点までが、いわゆる羨道部であつて天井石をもつものであり、そこから外側の部分は羨道部というより、むしろ前庭部的な性格をもつ施設であつて、天井石を欠くものであると推測できるのではないか。また変換点より外部に遺物が多く検出されたことについても、ある程度うなづけるような気がする。しかしいずれにしろ、あくまでも推測の域をでないものであつて、この推測がはたして当を得てゐるかどうか分らない。

最後に石室の床面についてみた場合、全体的に玄室からゆるやかに傾斜して羨道に至るが、玄室と羨門部との比高は約四一纏である。

遺物 遺物検出の状況については排土作業中と床面上との遺物に分けて述べることにする。

まず排土作業中の状況では、玄室の天井の前方の一部が破壊されていたため、流入した土が床面上約一米五〇纏の厚さで堆積していた。したがつて玄室の天井までの高さが二米二〇纏ほど露出してないことになり、前室は人がやつと這つて入れる程度しか空間がなく、羨道部は完全に埋没している状態であった。排土作業はまず玄室を主体に始める一方、羨道部の探査も並行して行なつた。遺物は玄室において早くも流入土の上面から出土しはじめ、かなり乱れていることを予想せざるを得なくなつた。流入土の中には木炭片や片岩の角礫が多く含まれ、須恵器片に混

じって土師片、糸切底片が検出された。また堆積土を約二〇～三〇糪ほど掘り下げたところから人骨を検出した。中には焼けた人骨片も認められた。人骨を含む土層は約五〇糪の厚さで、灰褐色を呈し、その同層位から須恵片、土師片、糸切底器片、六個の五輪塔の頭部（空・風輪）などを掘り出し銅錢も四枚検出した。人骨の数については少くとも一〇体を下らないほどであり追葬に追葬を重ねたものと考えられる。その他前室と羨道部の排土中にもかなり多数の須恵器片、土師片が出土し糸切底は完形品に近いものがあつたが、須恵器片は相当に小片になつた状態であつた。

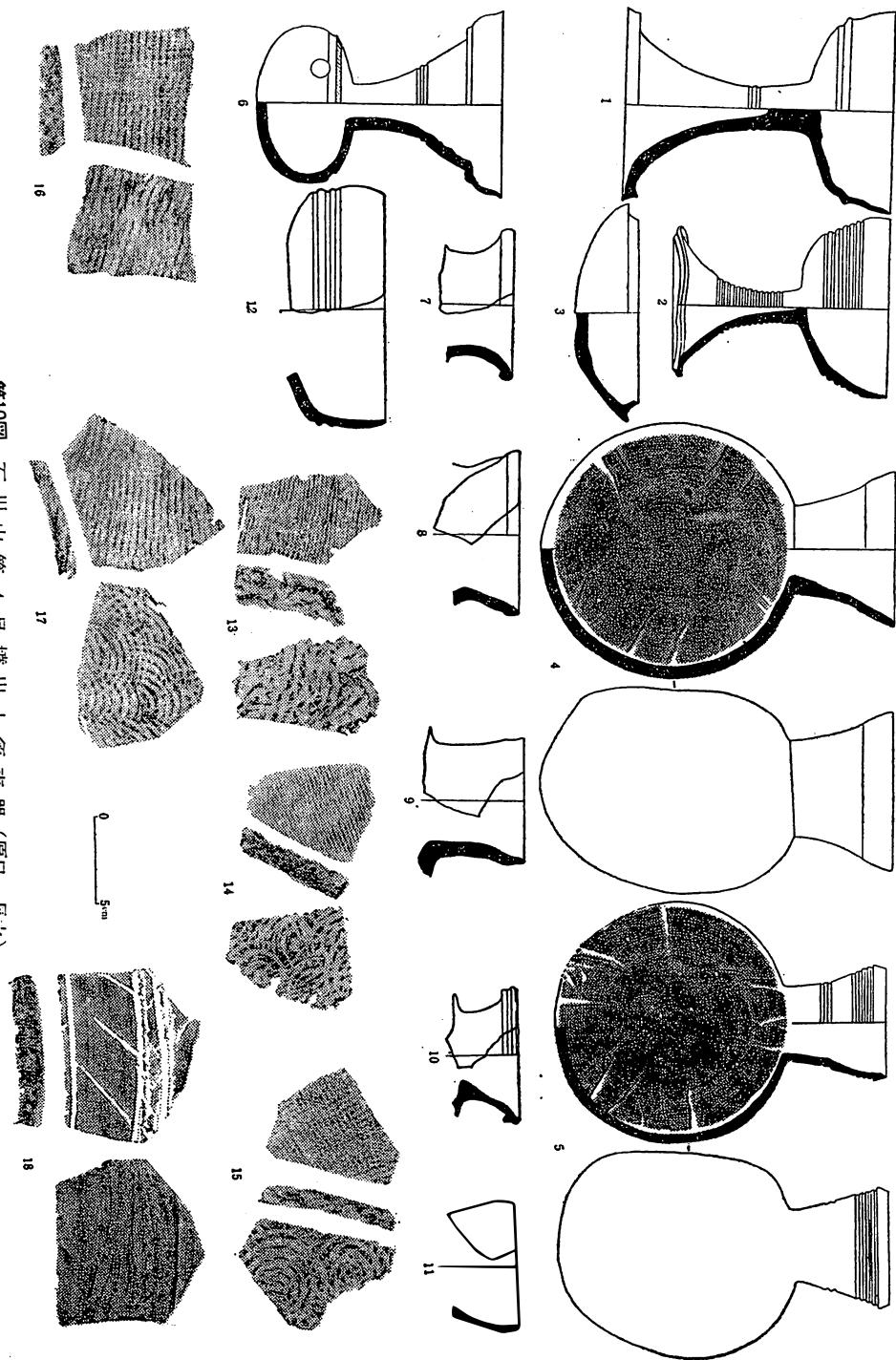
つぎに床面上の遺物についてふれたい。玄室では排土作業中とほとんど変りなく、須恵器片、土師片が散乱した状態で出土した。また滑石製鍋の破片とみられるものが石屋形の向つて左袖石付近から出土し、石屋形の天井部の破片とみられる凝灰岩塊が、ちょうど天井部破損箇所の下あたりで認められた。前室においてもほとんど排土作業中の状態と變らないが、羨道部の一部からは多数の副葬品を検出した。西壁寄りのところから提瓶、瞑、高坏などの須恵器や土師器や、金張りの雲珠片、銀製品、鉄鎌、鉄斧などを検出し、東壁近くのところから鉄製馬具類が出土した。（限 昭志）

須恵器（第一〇図）

高坏 二個 ①は全高一五・二糪、口径一一・五糪、脚径一一糪、坏部は立上りの部分に各一条の隆起線と沈線をもち脚部には二条の沈線がめぐっている。肌はさらついた感じである。器形は整っている。須恵器編年上第三期におくことができる。②は全高一二・二糪、口径一〇・二糪、脚径七・五糪、坏部の深さは六・二糪もあって盤に近い感じを持っている。脚部にひずみがあるが色相は青く美しく、坏部や脚部の沈線の刻みも整正である。第五期に属する。

坏 完形一、口縁部破片一個。③は前庭部から出土。焼成不十分で外側は須恵器の色相を持つが上部および内部は土師のような色相を示す。本来は須恵器として焼いたものが火力不十分の結果、こうなつたものであろう。坏の内面にろくろのすじ目がたつていてが外面は明瞭でない。全高三・六糪、口径一〇・五糪、蓋受けの立ち上りがよわくなつて萎縮した感じがある。第四期。蓋受けの立ち上りをもたない坏の口縁部が六個ある。一個をのぞいて他は胎土もわるく器面もさらついて粗製品である。所属時期は、はつきりしない。蓋受のあるものが五個ある。第三期におけるものが二個、第四期相当が三個である。

提瓶 二個 ④は全高二〇・一糪、口径九糪、胴部の最大径は一四・七糪、頸部は八の字型に外反している。ろくろの筋目が美しく一種の文様としての装飾的効果さえあげている。黒ねずみ色で焼成は堅緻、古式の姿がのこっている。第三期。⑤は全高一八・八糪、口径六・五糪、胴



第10図 石川山第4号墳出土須恵器(原口長之)

部の最大径は一一・八釐を計る。頸部の立ち上りの反りが弱く④に比して萎縮感がある。口縁の内外ともさざとっている。④とおなじくろくろの筋目が美しく、ねずみ色で焼成はよい。第四期。

硯 一個 ⑥全高一四釐、口径一〇・六釐、胴部最大径八・九釐、口縁部は頸部とのさかいに段をつくって急に坏状に開いている。頸部は胴のつぼまりをきちつと引き締めて立ち上り、頸部に二条の沈線をめぐらしているのも器形の整正さをたすけている。底部にいわゆる釜印がある。第三期に属し高坏①提瓶④とともに、この古墳編年の中限を示す好資料である。このほかに硯の胴部破片が一個ある。器面がさらついて焼成・胎土ともによくない。

壺 口縁部破片が五個ある。⑦はねずみ色、表面はさらついて器の割れ口は瓦器に近い色をしている。口縁部の下方に釜形のようなへら書がある。⑧はねずみ色、割れ口の感じは⑦と同様。⑨は黒ねずみ色、器面はあまりよくないが胎土、焼成ともによく一部に釉のような光沢がかかっている。⑩口縁の径の復元に困難を感じるほどひずんでいる。器面は内外とも非常にさらついて胎土にも砂の混入があり割れ口が瓦器の色に近い。実用のものとは考えられない。⑪はねずみ色、胎土に砂粒を交えている。器面にろくろの筋目があり、さらついた感じがあり割れ口は瓦器の色に近い。

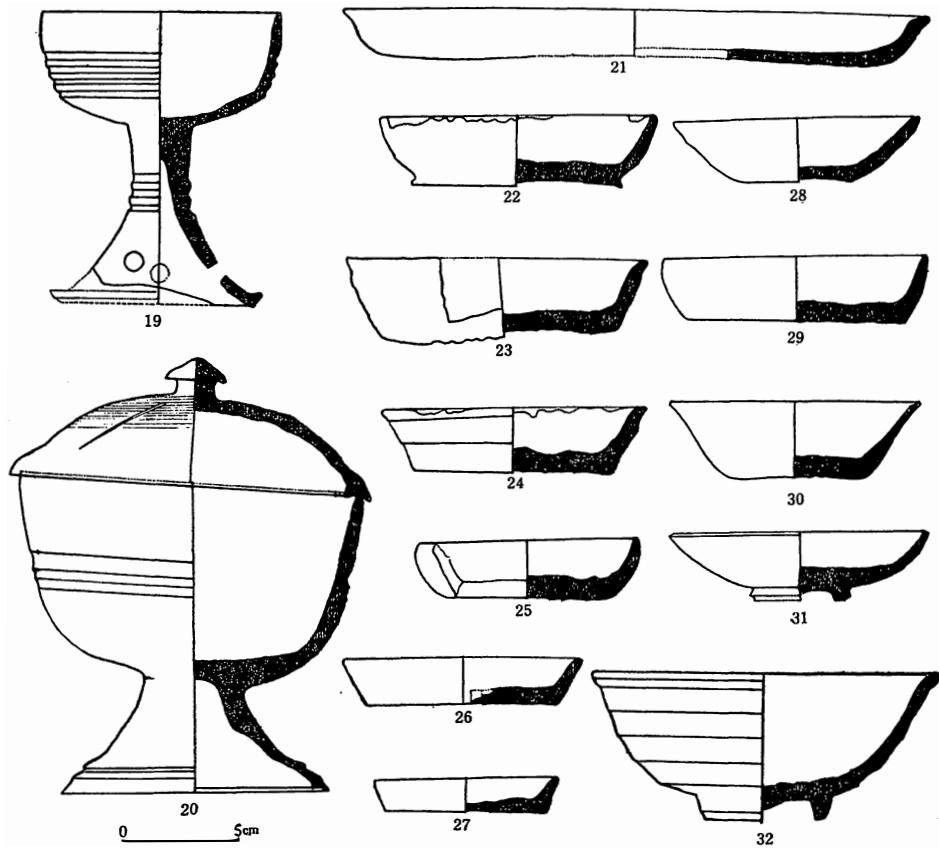
台付椀⑫ 椀部に当ると思われる口縁部破片がある。黒色、胎土よく焼成も堅緻、整った感じがある。底面はろくろの筋目がはつきりついている。

このほか須恵器の破片が二六七個ある。胴部の細片が大部分で器形の復元は困難である。このうち無文のものを除いて残りの破片を文様、叩き目によって分けると⑬⑭⑮⑯の四種類となる。いずれもねずみ色で胎土よく焼成堅緻、中でも⑬がもっともすぐれている。

瓦器 ⑰⑲の二種類がある。⑰は須恵器に似た文様、叩き目をもち⑲は黒色平滑な面にへら書きの直線文様をもつ。いずれも大型の甕の破片である。

土師器（第一一図）

高坏 二個 ⑯は全高一二・三釐、口径一〇・二釐、脚径八・四釐、坏部は深く四・五釐もあり口縁の立ち上りは強い。脚部に円形のすかしが三個所に入っている。しかしをあけるに当っては脚の裾の内側から削りとつたもので、しかしの内側が外側よりも大きくなっている。胎土をわめて良く赤褐色の色も明るく器形も整っている。須恵器の編年においてみれば第五期に相当する。⑰はつまみのついた蓋を持っている。全高一八・四釐、このうち蓋の高さ五・四釐、身の高さ一三・一釐、口径一四・七釐、脚径にひずみがあるが作りの印象は非常によい。蓋にいわゆる釜印がある。須恵器第四期に相当する。



第11図 石川山第4号墳出土土師器・土師系土器・磁器（原口長之）

盤 ②1 全高一・二糰、口径二五・三糰、底径二二・二糰、器面は丹塗磨研され胎土、器形とも精良である。

土師系土器 ②2～②9

このうち②8を除いた七個は時計の針の方向の糸切底をもっている。強い焼成のため白褐色の色になった②6以外は、すべて赤褐色を呈しさういた肌をしている。②5②8の口縁部には油煙が付着している。

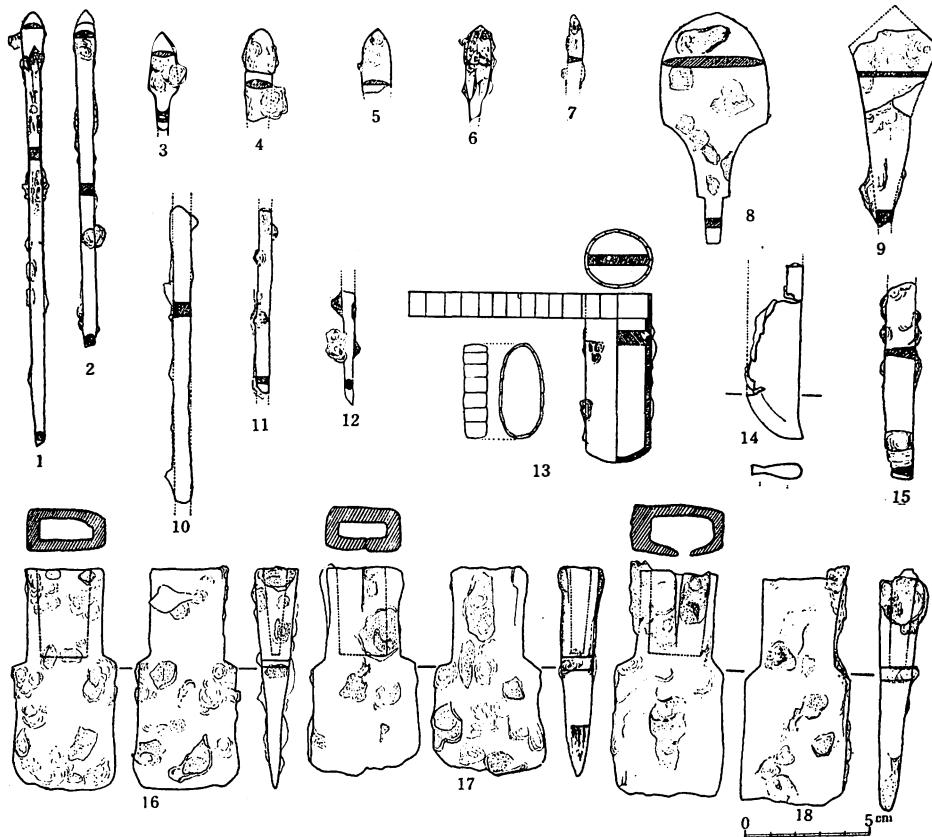
磁器（第一二図）

三個。③0は全高三・三糰、口径一〇・六糰、底径六糰。糸切底。口縁の内側と外側をそぎおとしている。灰黄色の釉が美しい。③1は全高二・九糰、口径一〇・八糰、底径三・九糰、高台がある。淡黄色の釉がかかっている。③2は高台付深鉢で全高六・二糰、口径一五糰、底径五・一糰。淡青黄色のしつかりしたつくりである。

武器類（第一二図）

鉄鏃 一二三個

このうち形式判定可能なもの九個、茎だけの残欠一四個がある。後藤守一氏の分類に従えば①②は斧箭式で細根片丸造に属する。①は全長一七・五糰、②は欠損しているが①とほぼ同長とみてよく共に茎の長いことに注意される。③④は両丸造柳葉式⑤⑥は片丸造柳葉式、⑦は片刃矢式、⑧は広根椿葉式、



第12図 石川山第4号墳出土武器・工具類(原口長之)

⑨は斧箭式の圭頭広根である。⑩⑪⑫は茎だけの残欠で、この種のものが一四個ある。実測図には、その三例をあげた。

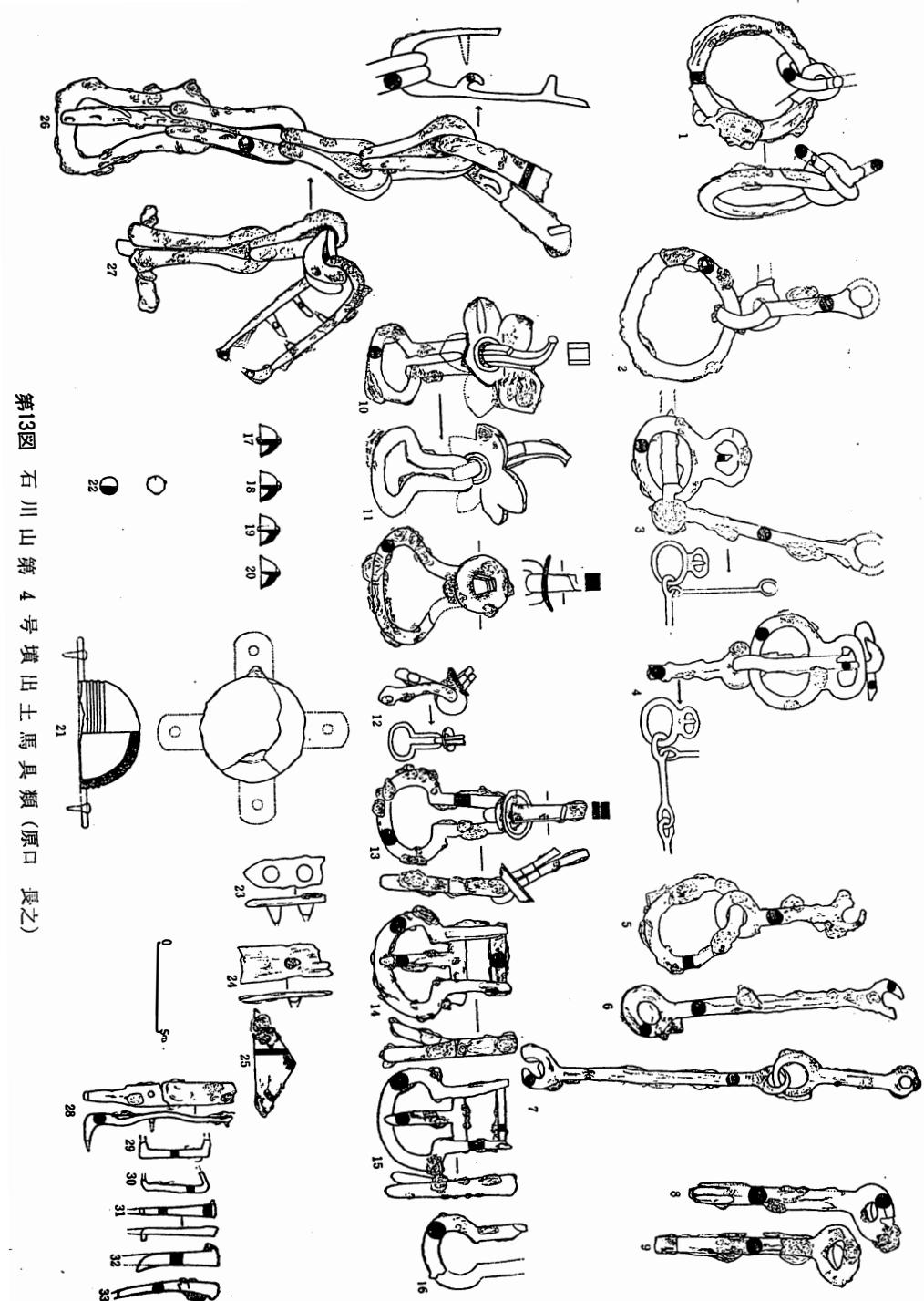
石突 一個 ⑬は全長六・八纏、直径二・七纏、石突というよりも筒形鉄器といった方が当を得ているかも知れない。鉄製袋状の円筒の口縁に幅一纏の金銅製締め道具をもっている。口縁から一・五纏さがったところに直径〇・六纏の目釘が一本残っている。内部に腐朽した木質が残っていて木製の柄の一端をつつんでいたものであることがわかる。この点から考えると檜の石突であろうと思われるが一般に知られている石突は細長い円錐形のものが普通であつて本品は異形があるので、一応石突としながらも疑問を残して置きたい。

鞘 ⑭ 銀薄板製。残存部の長さ七纏、身幅二・一纏、外反りの刀子に用いられたものであるが惜しいことに刀子を失い鞘尻の部分だけ残っている。

刀子 ⑮きつさきの部分を失ない残存部の長さ八纏、身幅一・四纏、刃まちだけで棟まちはない。

工具類(第一二図)

鉄斧 三個 ⑯⑰⑱とも遺存の状態は良好である。いずれも鍛造、有肩式で割截用のものである。⑯は袋部につきあわせがない。⑰⑱は袋部のつきあわせが顕著である。



第13図 石川山第4号墳出土馬具類(原口長之)

馬具類（第一三図）

轡 鏡板・銜・引手の残欠がある。①②が一組、③④がまた一組である。前者の引手はおそらく別づくりの壺をともなっていたと思われる。大阪府長持山古墳出土の轡と相似しているが、引手と銜の間に遊環を持たず、鉄製環状形の鏡板に直接、引手と銜を連結している。時代の下降を示すものであろう。後者の③④は鉄製環状形の鏡板に鍛具がつけられている。群馬県群南村綿貫のこれと同様な出土品が七世紀に比定されている。実測図の横に矢印で示めしたのは、説明図である。⑤は引手をもたない。鏡板に皮革製の引手を直接つけたものかもしれない。⑥⑦が引手、⑧⑨は銜の残欠である。

四方手 ⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯の五種類がある。⑫⑬と⑭⑮はそれぞれ一組をなしている。⑭⑮は尾錐であるが、大阪府道明寺町、長持山古墳からこれと同様な形制をもつ四方手が鞍橋にとりつけられたまま出土し五世紀に比定されている。⑩は花形の座金に遊環、⑪、⑫⑬は円形の座金に遊環をとりつけている。⑫の矢印のついた右側の図は説明図である。古墳時代のものは尾錐に座金をつけて、深く木部にうちこんだものが多く、奈良時代前後には遊環を用いたものがみられることから⑭⑮が最も先行するものであるといえよう。⑯は⑫に類似したものの残欠である。

飾金具 ⑯～⑯までは飾金具、⑰は雲珠、⑲は球形の鉄製品で用途がわからないが雲珠の円頂につけられた飾りかもしだれない。いづれも鍛金のあとがのこっている。雲珠は特に大型で古い形制をもつもので本墳の須恵の第三期に相応するものである。

鐙軸 ⑳㉑は鞍かられた力革をとりつけるための鉄製の鐙軸の部分である。㉑は腐蝕が著しいが㉒と対をなすものである。㉑の矢印は㉒が㉓とともにとおなじ構造のものであることを示めしたものである。

其他（第一三図）

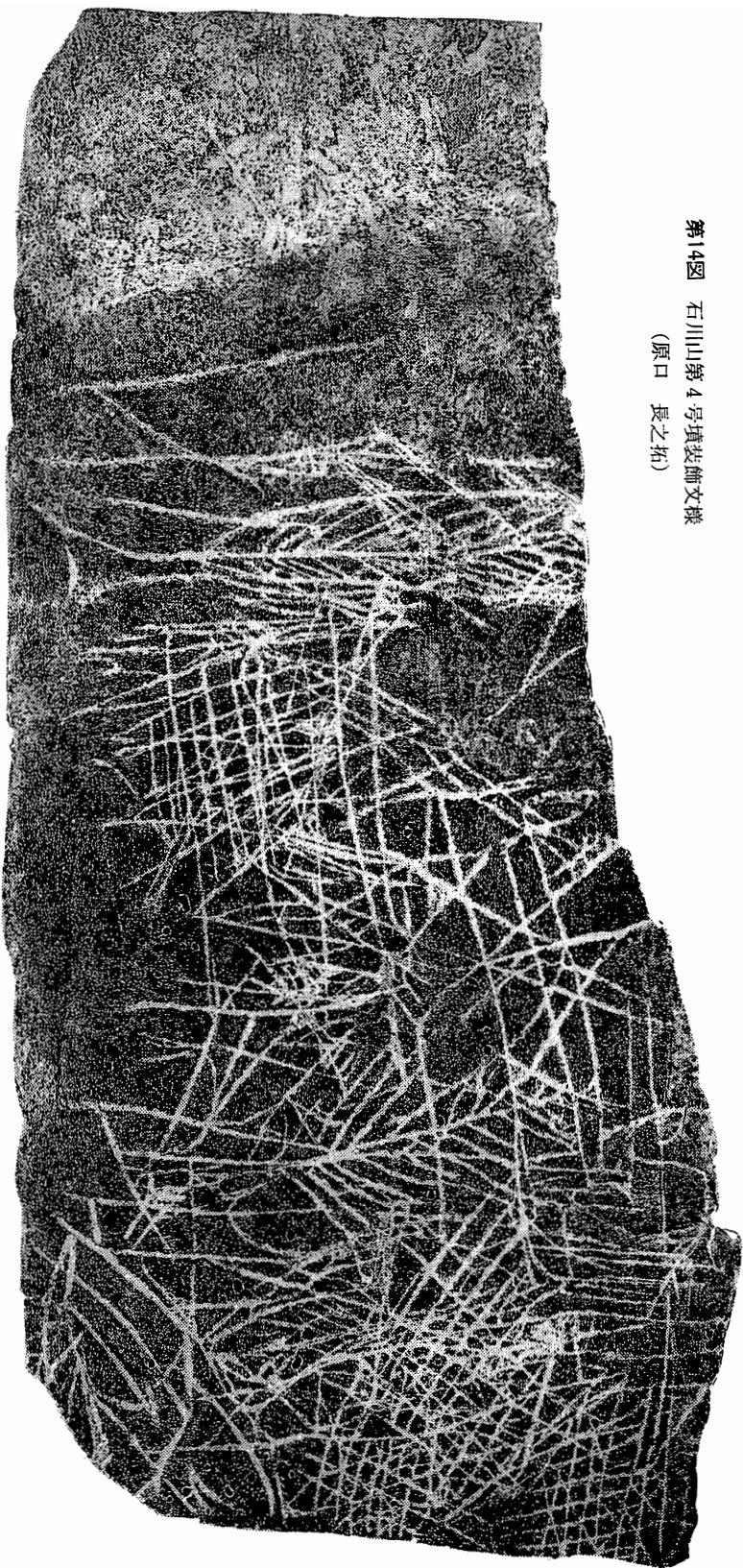
鍼㉔㉕㉖ 鈚㉗㉘㉙断面四角形の針が三個、かすがいが三個ある。

人骨 搾乱されて後世追葬されたものもあり現在熊本大学医学部解剖学教室において整理中である。

錢貨 四個、政和通宝、洪武通宝、○○通宝が各一個、のこりの一個は銘がわからない。（原口長之）

註① 本稿における須恵器の編年については平凡社「世界考古学大系3」所収「古墳時代須恵器の編年略表」を参考にし表中の「様式」欄の二子塚・穀塚を第一期、陽徳寺・水尾を第二期、南塚・海北塚を第三期、荒坂・桃谷を第四期、野畑を第五期とした。

② 小野山節「馬具と乗馬の風習」引用写真世界考古学大系3所収
③ 水野清一・小林行雄「図解考古学辞典」三九八頁

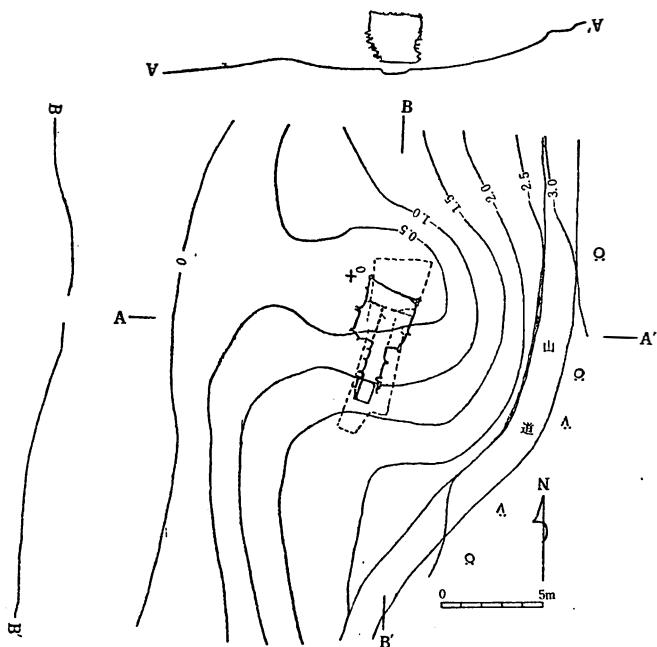


第14図 石川山第4号墳裝飾文様
(原口 長之拓)

装飾文様（第一四図）

第一羨門に近く羨道上に架した巨石の下面に浅い陰刻による装飾がある。林にかこまれた家を表現したものであろうと思われる自由画風の文様である。巨石の側面に線刻があるが何をあらわしたものか、わからない。（原口長之）

(5) 第五号墳



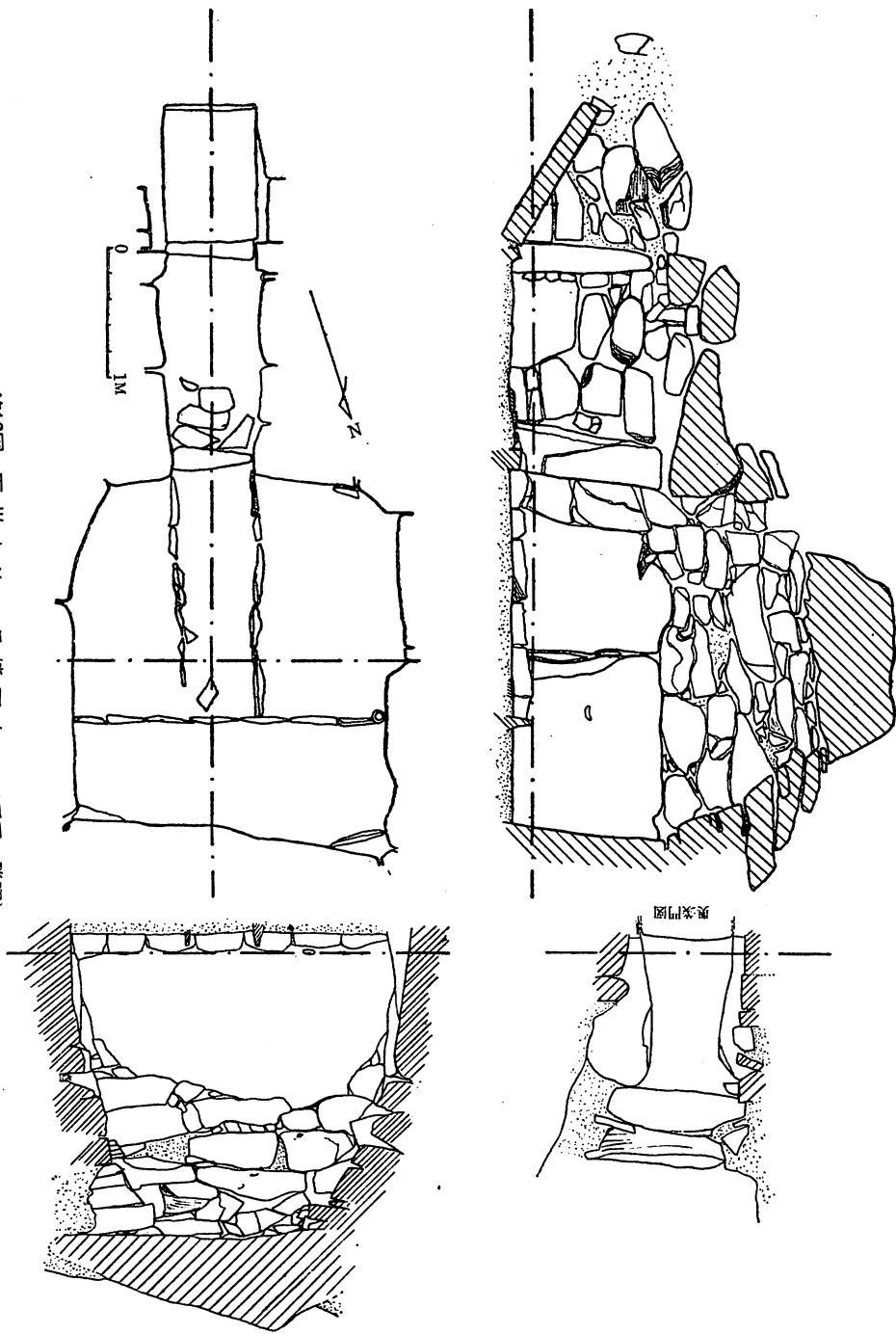
第15図 石川山第5号墳墳形図（平岡勝昭）

墳形（第一五図） 径一六米、高さ三米の円墳である。丘陵斜面を利用しているため墳形図では舌状になっている。元来は天井石がかくれるぐらいの盛土があったと考えられ復元すると高さ四米になる。

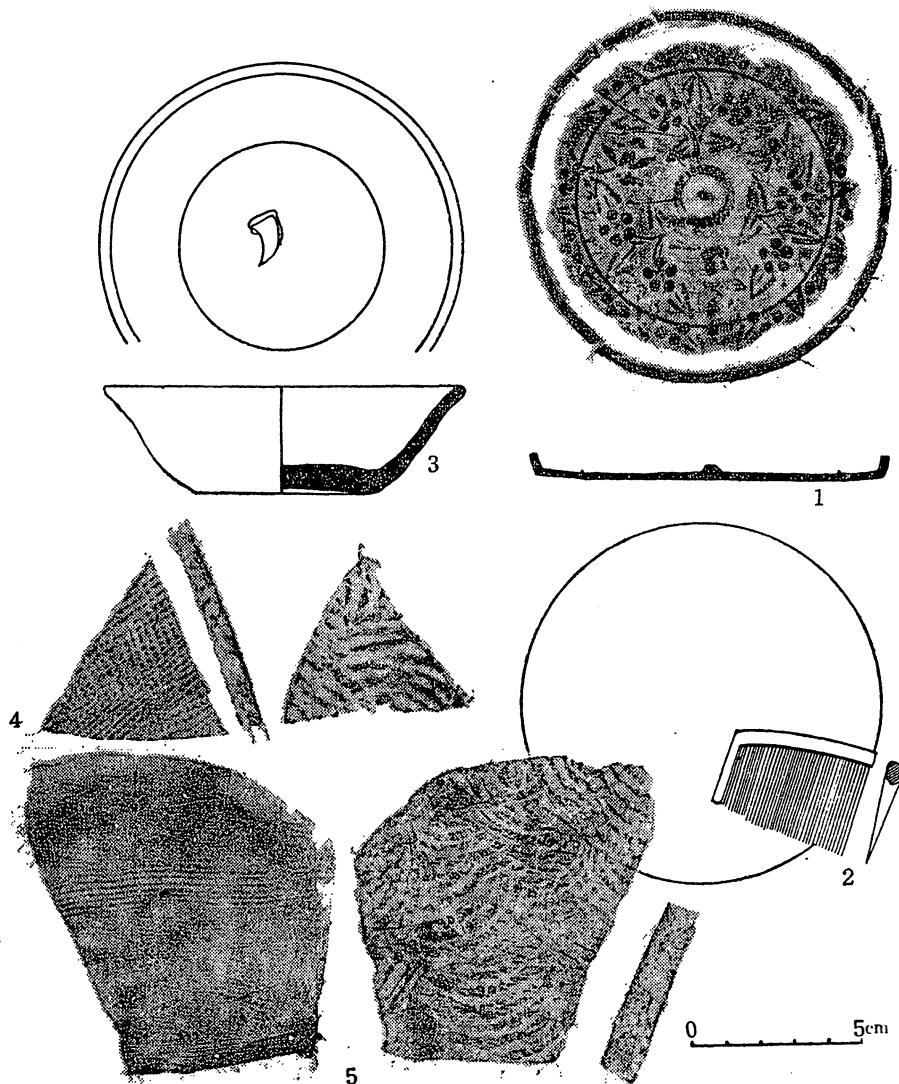
石室（第一六図） コの字型の三区の屍床をもつ横穴式石室である。主軸の方向は北一八度東、石室全長は五米二七糢で南に開口し玄室と羨道より成る。

玄室の長さは二米六五糢、幅は二米五七糢、天井の高さ二米三〇糢。奥壁は二米四〇糢の一枚石の巨石の上に自然石を小口積みにする。石材は安山岩、石灰岩を使用し凝灰岩は認められない。屍床は三区にわかれ奥壁と両側壁に各一個、安山岩の板石をたてならべ屍床を区切っている。床面は安山岩及び石灰岩の細屑を粘土で叩きつけて作っている。

羨道部は玄室に直結し羨門ぞいの幅六〇糢×八〇糢、長さ一米一七糢、高さ一米一五糢、玄室入口と羨門部は巨石を縦につかい、他は小口積みである。天井石は三枚使用されている。玄室と羨道部、羨道部の出口のところには床面に区切り石がある。敷石の残存が若干認められるが、もともと全面に敷いてあったものではないだろうか。玄室床面より羨道部の床面がやわらか



第16図 石川山第5号墳石室図(平岡勝昭)



第17図 石川山第5号墳出土品(平岡勝昭)

いことから推して、このことが言えるように思う。

遺物 (第七一図) 遺物は古墳時代のものと歴史時代のものとに大別される。

古墳時代の遺物として須恵器片がある。玄室入口の破片④⑤は比較的原初の状態と考えられるが他の遺物も散発的ではあるが当古墳に関係ある遺物とみなしてさしつかえなかろう。

歴史時代の遺物として和鏡、櫛、青磁の出土があった。四号墳と同様に平安時代に入り開口され二次利用されたものである。

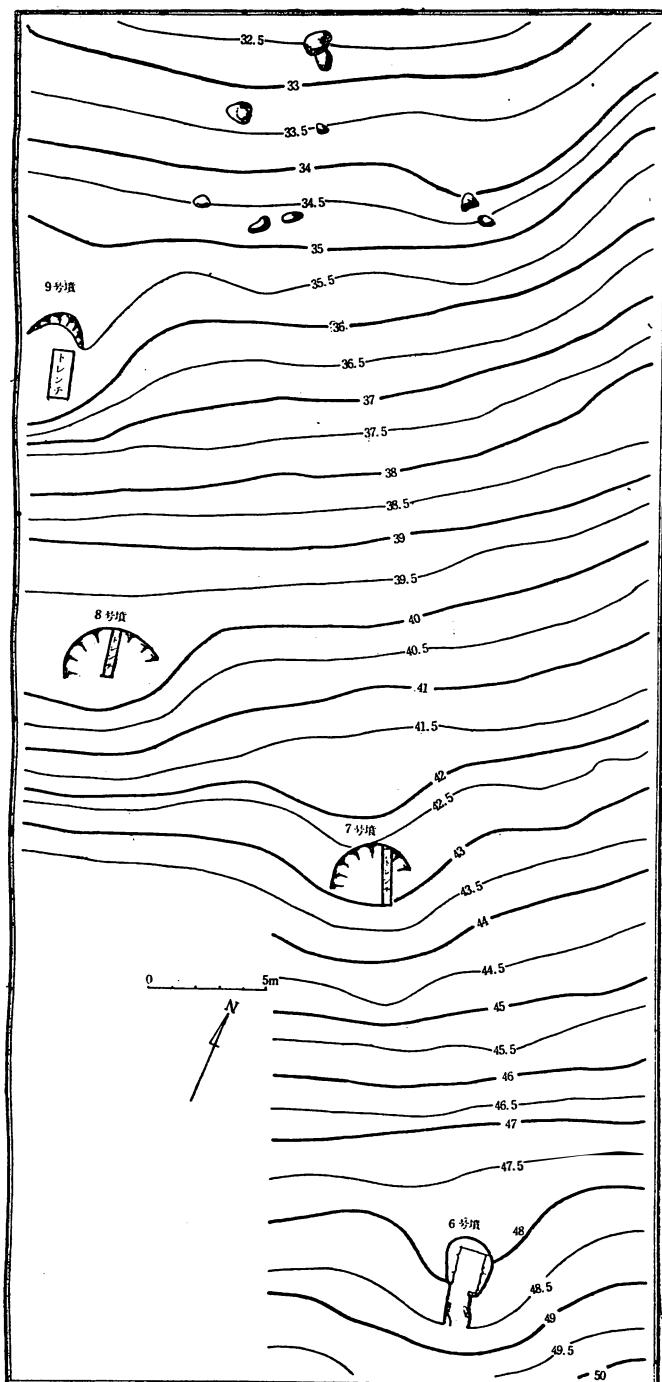
和鏡と櫛 ①② 鏡の真下に櫛があった。もともと櫛は完全に遺存したものであろうが、玄室天井部の落石を取除きながら床面の把握が目的であったので鏡の下にしかれていたところだけが検出され鏡からはみ出していた部分は消失したものと思われる。

石川山古墳群調査報告

鏡は和鏡で径一〇・六厘、鏡面は縁にちかい部分がわずかに外反しているがほぼたいらである。せまい縁が鏡面と一〇五度の角度をもって突立っている。鏡背は小さい紐と紐座、一本の界線によって区切られた内区と外区およびせまい縁にわけられる。内区は草花によって三区にわけられ、そのうちの一区には鳳凰と思われるものを描き、一区には松葉らしいものを配している。内外区の別を界線で区切ってはいるものの文様は同じもので、花と葉の一部を外区に描いてある。紐は小さくてあまり手ずれのあとは見られない。鏡の一部に紙が部分的に付着している。

櫛は横型の木櫛である。現存長四・一二厘、幅三・二厘、櫛の歯の間隔は一厘につき一本ある。鏡と櫛は鏡箱又は櫛箱に入れられていた形跡は認められない。又櫛は頭飾として使用されたものとも見られない。しかしこの二者は共に埋められたものである。

青磁皿③径一一厘、高さ三・二厘、中に、ノの字型のヘラ印がある。釉薬は薄緑色で、口唇部はそぞとて釉薬が使用されていない。



第18図 石川山6号～9号墳立地地形図
(註) タンターの数値は第二号墳三角点よりの
一米を表わす (緒方 勉)

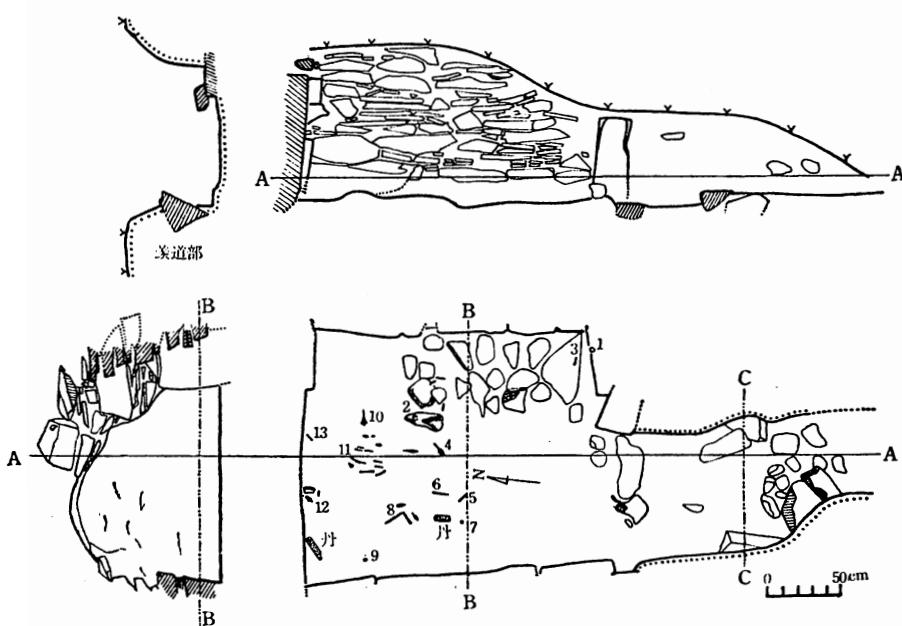
人骨 頭骨および肢骨で遺存状態はよいが何等かの事由で二次的に埋葬されたものであろう。頭骨は六・七体分あるが、それに伴なう肢骨は少なく、火葬と考えられる骨粉もみられた。（平岡勝昭）

(6) 第六号墳

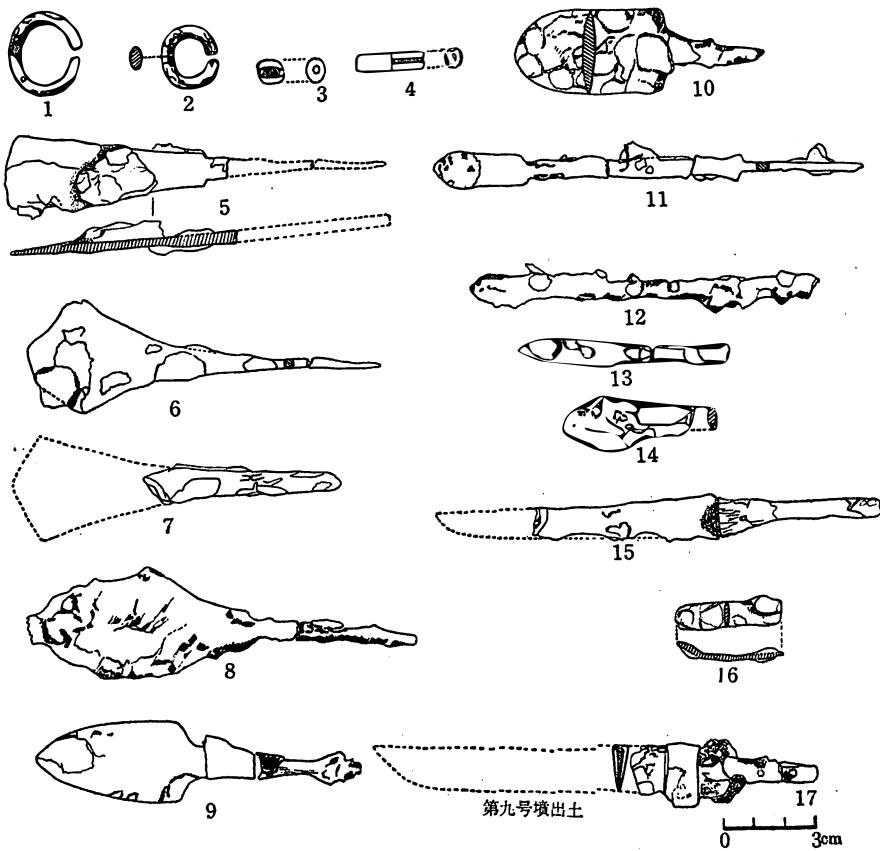
墳形（第一八図）他の七、八、九号墳と同様、石川山南斜面に位置し斜面にドーム状のわずかな盛りあがりを見せており、封土の中央は落ちこんで盜掘を受けたことを示している。盛土に使用された土は他から運ばれて来たものではなく周囲の土をかきあつめて使用したものであろう。石室の床面は地表下一米のところにあり盛土も殆ど必要でなかつたのではなかろうか。山の斜面に構築されているため封土の流失も相当あつたと考えられるが復元すれば一米前後の封土があつたものとすることができよう。

石室（第一九図）第三、第四、第五号墳の石室とは比較にならぬほど貧弱である。使用石材も玄室奥壁の一枚石以外は小さなものばかりである。玄室とそれにつづく羨道部からなる单室墳である。石室の主軸は大体南北の方向をとり玄室奥壁から羨道部入口まで約三米七〇厘米ある。羨道部入口が崩壊しているため正確なところは不明である。

玄室は東西約一米六四厘、南北二メートルで長方形をしている。比較的大きな石材を使用している奥壁を除いて東壁、西壁は割石の小口積みにより構築されている。床面は現在南東隅に敷石が残存していることから推測して構築当時は床面に割石が敷きつめてあったものと考えられる。玄室内から丹塗りの石材が発見されるのでもとは側壁の全部又は一部に丹が塗つてあつたかも知れない。



第19図 石川山6号墳石室図(桑原憲彰)



第20図 石川山第6号墳出土品(桑原憲彰)

羨道部の袖石は東側だけで西側ではない。羨道部の破壊は甚だしくその形状の復元は困難である。両側壁には石積みが認められず石材が散乱するのみである。羨道入口附近に石材の破片が集まっているのは入口の蓋石の意味であろうか、羨道と認めてよいものであるか疑問が残る。

現在石室の側壁は床面より約一米の高さまで現存しているが、この側壁上にすぐ一枚の天井石を架してたのか、割石を持ち送りに内部に積み出してその縮約したところで天井石を架していたのか不明である。あるいは現在の側壁にそのまま板又は丸太をかけわたして天井としていたのかも知れない。現存する石材が非常に少なくドーム状天井をつくるだけの量がないことは、この推定を支援するかも知れない。

遺物(第二〇図) 小古墳としては意外と豊富な副葬品を出した。

装身具 玄室内から金環二個、小玉一個、排土中から管玉一個の出土を見た。

金環 ①は既に鍍金が剥落して鉄地ばかりになつてゐる。環形はやや扁円をなし断面は円形を示めす。②は床面より高さ二四厘の東壁の間から発見された。鍍金は完全にのこつていて。環形はやや扁円で断面は橢円をなす。この二つの金環は大きさも異なり対をなす

ものではない。

小玉 ③は淡青色のガラス製で外から内部の糸穴がすかしてみえる。

管玉 ④小型のもので粘土製で外部を籠で調えているのに注意される。表面は黒灰色、内部は瓦質で灰色を示めしている。

武器類（第二〇図）

鉄鎌

一〇個出土した。⑤は方頭広根斧箭式、⑥は圭頭広根斧箭式、⑦も同様であろう、⑧は変形広根定角式、⑨⑩は広根椿葉式、⑪⑫⑬は細根両丸造柳葉式⑭もその変種として扱つてもよからう。鉄錆がつよくて判別が困難である。

刀子⑮ 刀先が欠損していて正確な長さは不明、一〇糰ばかりの刃渡りを持っていたと考えられる。茎に骨質が残存しており、もと鹿角製の把が装用されていたと思われる。目釘穴はない。刀身に木質の付着はない。

その他、鉄片が六片ほど出ている。鉄鎌の刃部や茎、把などの破片かと思われるが原形を明確にし得ない。⑯は鉄鎌の刃部であろう。

四号墳と異なり馬具類、容器類の出土をみないのは意外であった。

第一九図の石室床面図においては採集時の遺物の位置を示したが、早い時期に盗掘にあい攪乱されており、この位置が葬送時における原位置とは考え難い。他に石室西壁下にわずかの人骨片と大臼歯一本が認められたが腐蝕がひどく採集は困難であった。歯の位置から恐らく遺体は西枕に葬つてあつたものと推定される。（桑原憲彰）

（7） 第七号墳（第十八図）

既に盗掘を受けていたため自然地形に陥没が見られた。その陥没しているところに幅五〇糰、長さ三米、深さ一米位のトレンチを入れた。そこからは古墳構造物その他の出土遺物はなかった。更にトレンチを拡大したならば第六号墳のように石室構造が発見できたかもしれないが、時間に追われての作業でそれを解明するにいたらなかつた。しかし幸にトレンチの周辺から丹彩せる安山岩の割石数個を採取することができ、それが盗掘の際の古墳築造物の一部と認めることができ、七号墳の存在を裏付けることにもなつた。（緒方 勉）

（8） 第八号墳（第十八図）

七号墳の左上方に八号墳がある。七号墳と同じように自然地形の陥没があり既に盗掘を受けていたものとみられる。幅五〇糰、長さ一米五〇糰、深さ約一米のトレンチを入れてみたが特別な発見はなかつた。しかし七号墳の場合のようにトレンチの周辺から古墳築造物の一部と見られ

る丹彩した安山岩の割石を採取することができた。(緒方 勉)

(9) 第九号墳(第十八図)

八号墳の上方に更に一基、古墳の残骸らしいのを発見した。地形に陥没が見られることは前二者同様である。ここにも幅一米、長さ二メートル五〇粍、深さ約一米のトレンチを入れてみた。このトレンチから刀子の破片一個を発見することができた。九号墳の周辺を探索した結果、家形石棺の一部と見られる阿蘇熔岩の破片を採取した。この採取した石材の中には、面をもつたものが数個、中には稜線をもつたものもあるが破片がこまかいため図示による復元は困難であった。破片のなかに丹塗りのものが含まれていることなどからして九号墳を家形石棺を埋置した古墳と見て間違いないまい。

遺物(第二〇図四) トレンチ内出土の刀子は刀身のほとんどを欠いており、柄の部分および柄の胴締めが残されている。柄には目釘穴が二個所あり、うち一個所には目釘が一側に残存している。また柄には柄部を構成するところの木質の一部が胴じめでしめられた形で残っている。刀子の現在の長さは六・一粍である。(緒方 勉)

む
す
び

前数項において本古墳群を構成する九基の古墳について報告したが、以下その概括を試み本古墳群の年代について考えてみたい。

〔一〕 古墳使用の尺度

古墳構築に当っては何等かの尺度が使用されたろうと思われるが熊本県下のいくつかの横穴式石室について検討したのが次頁の表である。表の作製に当っては次の方法によった。

(1) 玄室床面の奥行と間口をはかる場合、左壁と右壁の長さ、奥壁と前壁の幅が等しければよいが、そのように正確な形を示めしているものはない。この場合、どの部分の寸法をとりあげたらよいかが問題になるが尾崎喜左雄氏は玄室の長さについては右壁、中央、左壁。幅については奥壁、中央、前室のそれぞれ三ヶ所について計測し各個の事情によって、その中から適当と思われるものを検討して代表的数値をきめる方法をとって居られるが本表においては玄室床面形ができるだけ整正で方形又は長方形に近いものをえらんだ。その結果として奥行は玄室の中軸線の長さ、間口は奥壁の幅をとりあげることを原則とした。

古墳名	尺度	奥行	間口	備考	古墳名	尺度	奥行	間口	備考
井寺		320	264	間口は奥壁の幅をとつた	弁慶ガ穴		315	279	
	晋	13…8	11…0			晋	13…3	11…15	
	高麗	9…5	7…19			高麗	9…0	8…1	
	唐	10…20	8…24			唐	10…15	9…9	
大坊		340	270		石川山第3号		300	220	
	晋	14…4	10…0			晋	12…12	9…4	
	高麗	9…25	7…5			高麗	8…20	6…10	
	唐	11…10	8…0			唐	10…0	7…10	
チブサン		360	360		石川山第4号		350	254	
	晋	51…0	15…0			晋	14…14	10…14	
	高麗	10…10	10…10			高麗	10…0	7…9	
	唐	12…0	12…0			唐	10…20	8…14	
稻荷山		290	290		石川山第5号		270	240	
	晋	12…2	12…2			晋	11…6	10…0	
	高麗	8…10	8…10			高麗	7…25	6…30	
	唐	9…20	9…20			唐	9…0	8…0	
永安寺東		280	240	奥行は玄室前壁しきい石まで測つた	石川山第6号		200	174	
	晋	11…16	10…0			晋	8…8	7…6	
	高麗	8…0	7…5			高麗	6…25	5…1	
	唐	9…10	8…0			唐	6…20	6…6	

(口) 石川山以外の古墳選定に当つては一般に編年上の位置を是認されているものを各時期から選定した。使用される尺度の変遷を見ようと考えたためである。⁽²⁾

(イ) 設計によつて構築する場合、大きな岩石を使用することであり、構築技術の巧拙などのこともあるので、尺度の長さで計数値を除した場合、割り切れないときはもつとも整数倍に近いものを使用の尺度とした。また玄室の奥行を尺度で除した数値と玄室の間口を尺度で除した数値を比較して使用尺度を決定するに当つては奥行を尺度で除した数値を重んじた。というのは石室の構築に当つては、まず中軸線の一方のはしに奥壁になる石を据えるのが順序であろうと考えたからである。

(二) 尺度の実長としては晋尺〇・二四纁、高麗尺〇・三五纁、唐尺〇・三〇纁を用いた。

本表によつて次のようなことが氣付かれる。

切石を小口積みにしてドーム状の天井をもち直弧文に飾られる井寺をはじめとする大坊、チブサンなどの熊本では六世紀前期に比定される古墳の玄室は晋尺をもつて構築されたようであり、それは六世紀の中期ごろの稻荷山古墳まで続き、巨石を立てて側壁の腰として切石を三段に積んだ永安寺古墳や弁慶が穴古墳は高麗尺によつている。

石川山第四号墳が高麗尺を使用していることは、その石室の構築法が弁慶が穴古墳のそれと類似している点からも納得できることである。石川山第三号墳が唐尺によつていることは、その石屋形が第四号墳の石屋形よりも退化が著しい点からも理解できる。

唐尺使用の確実な例として森浩一氏は近畿地方における横穴式石室の変遷上、終末期である第八期に属する奈良市帶解町黄金山古墳をあげておられる。⁽³⁾ 第八期の実年代をいつごろに比定しておられるが分明でないが、熊本県の場合、六世紀末から七世紀初頭におかるべきではないかと思われる。

第五号墳は唐尺でみごとに割り切れた珍らしい例である。

第六号墳の計数値は晋尺に近い。このことについてはあとで触れたい。

なお石室における玄室と羨道の高さの比から墓相の変遷をたどろうとする試みがなされているが、多くの場合、羨道部は破壊されて、その高さを適確にはかることに困難を感じるのでここにはそれを取りあげなかつた。

(二) 装飾文様について

第四号墳眉石の底面に前項の線刻による壁画がある。

装飾古墳の分類について管見に入ったところでは小林行雄⁽⁵⁾、鏡山猛⁽⁶⁾、齊藤忠⁽⁷⁾、木村豪章⁽⁸⁾、樋口隆康氏⁽⁹⁾の研究がある。

樋口隆康氏は彫刻、彩色の装飾技法に石室構築法を組みあわせて横穴式石室を(1)主室は長方形で室の断面が梯形、栗石積の側壁、奥壁に石棺や石屋形の施設があり壁画に彩色を使用するもの、(2)主室が方形で側壁は割石の小口積、窓篠形の天井、主室内を石壁によつて四区にわけ彫刻によつて装飾するタイプの二つに分け前者は筑後平野を中心に後者は熊本平野を中心に多いことを指摘された。⁽¹⁰⁾

その後、装飾古墳の集成が進んで、その全容を見とおすことができるようになった結果、筆者は樋口氏の前記二様式のほかに大分型ともいふべきタイプを設定し得るのではないかと考へるようになつた。それは筑後系統の巨古墳に自由画風の線刻を施したもので大分県東部から福岡県、熊本県に点在する。代表例として大分県伊美鬼塚古墳がある。玄室奥壁の右側巨石に船上の人物と帆走船などを主体に多数の動きを線刻する。左壁下の巨石には無数の鳥類が群存の状態で線刻された飛鳥やゴンドラ型の船を混え、まとまりのある構図を仕上げている。⁽¹¹⁾ このタイプの特徴は、線刻によるデッサン風の手法と動画的な画材にあり六世紀末に属し島根・芦渡横穴、大阪・高井田横穴、茨城の猫渕、幡横穴、吉田白河内古墳、埼玉・地蔵尊古墳、千葉・外部田古墳などとつらなるものである。このタイプを仮に大分型と称するならば石川山第四号墳の壁画は熊本では緑川古墳、梅咲古墳とともに大分型に所属させることができよう。もちろん、この時期の古墳は合葬墳であるので、この壁画の施された時期が、そのままこの古墳構築の時期であるとすることはできない。

(三) 遺物について

土器は主として第四号墳から出土している。盜掘を受けているとは言ひながら須恵器を主とし土師器がきわめて少ないと云ふことはこの古墳の時期からいって当然の現象であろう。須恵器の範囲は須恵器の編年上、第三期から終末期の第五期におよんでいる。しかも歴史時代に入つて間もなく開口して以来、相当の期間にわたつて使用されたことがわかる。

古墳出土の馬具は轡部と鞍部、繫部の三部分からなるが、轡部の銜だけあって鞍部の鐙をもたないでセットをなす時代があつたのではない⁽¹²⁾かという疑問が出されている。また馬具埋納の場合、馬具セット一式を埋葬せず、例え鞍部だけ、あるいは轡部だけの部品のみを埋納する風習があつたのではないかといふ懸念もないではない。⁽¹³⁾ 前者は騎乗の風習が伝來した初源的な時期についての問題であるから、編年的に下降する第四号墳とは直接関係することではないが本古墳には轡部のほか、みづおの金具が添うていたことを念のため記しておく。後者については、盜掘をうけているので確證できないが馬具がセットとして埋納されたものとしては部品的なものが多すぎるので一抹の懸念が残る。

鏡板、四方手などは二期又は三期にわけられるようで、それは土器編年第三期～第五期に即応するものであろう。歴史時代の遺物、特に木製横型櫛の出土は珍例であろうと思うが正倉院御物櫛・河内土師神社藏⁽¹⁴⁾の櫛のほか寡聞にして類例を知らないので後

考を期したい。

(四) 本古墳群の年代観

以上、本古墳群の調査の結果、注意にのぼった点について述べたが、次に本古墳群を構成する各墳相互の編年的関係をのべて結末にしたい。結論から言えば未発掘の第一、第二号墳を除いて第三号墳以下については次の順序で編年が可能であろうと思われる。

第七・第八号墳→第九号墳→第四号墳→第三号墳→第五号墳→第六号墳

第七・八号墳は内部主体の確認はできなかつたが、丹彩を施せる安山岩の破片を得たこと、用材の量が少なく石室構築に不足することから恐らく石棺をもつていたであろうことは疑いない。石棺とすれば箱式か家形かということになるが、安山岩は加工に不便なこともあって家形石棺の場合は凝灰岩を使用することが通例であるので、この場合、箱式石棺が内蔵されていたものと考えるのが妥当であろう。

第九号墳は凝灰岩の家形石棺の棺蓋の一部を得ているので、これは家形をもつていたとして間違いない。石材の量、封土の貧弱さから石室内におさめてあつたとは思われない。

第七・八号墳と第九号墳のどちらを先行させるか簡単にきめられないが石棺作製技法の進化を念頭において第七、八号墳を先行させた。第三、第四、第五号墳については既に使用せる尺度に関連して前後関係を考えるところがあつた。石室構造上まず注意されることは玄室奥正面の石屋形である。山鹿市チブサン¹⁸、臼塚古墳¹⁹においては玄室奥壁沿いに、別個に製作した石屋形を据えてある。山鹿市弁慶が穴古墳になると棟を作り出した巨大な板石を東西の側壁にかけわたして屋根とし前面の左右両側に袖石を立てて、石屋形を作っている。第四号墳においては弁慶が穴と相似た形制をとりながらも弁慶が穴の棟の作り出しは失われ石屋形の退化を示している。第三号墳においては石屋形は前面の袖石を失ない、全体の構造はより粗雑となり第四号墳より更に退化が目立つてゐる。第五号墳は築造当時のものと思われる出土品がなく第四号墳との先後を判断すべき決め手を欠くが、羨道部と前室の幅が等しく袖石をたてて前室、羨道を区別する方法があまりに形式的で第四号墳より後出のものであろうと思われる。

第六号墳は計数値が晋尺に近いこと、割石の小口積で内部へせり出した側壁、出土品の鉄鏃に一〇例中、七例までが広根であることなど古風を存しているが、地山に床面を切りこんでいること、築造の当初から天井部を欠いていたかも知れることのために、古風を継承しながらも実際には時代のくだる終末期の一形態であろうと考へる。

以上、本古墳群築造の年代の考察をもって本文のおわりとする。

註①尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」

③例えは平凡社「装飾古墳」所収小林文雄編年の「九州の装飾古墳変遷図」など。原口も「肥後の須恵器の縄年試案」（西日本史学会創立十周年記念論文集所収）でこれに触れたことがある。

- ③森浩一「古墳の発掘」
- ④坪井清足「墓制の変貌」世界考古学大系4
- ⑤小林行雄「装飾古墳」
- ⑥鏡山猛「北九州の古代遺跡」
- ⑦斎藤忠「古墳壁画」日本原始美術5
- ⑧木村豪章「装飾古墳とその背景」
- ⑨樋口隆康「九州」日本考古学講座5
- ⑩樋口隆康 前掲書。

⑪賀川光夫解説「鬼塚古墳」日本原始美術5所収

⑫これらの横穴については日本原始美術5に解説がある。

⑬京都帝国大学文学部考古学研究報告第三冊「九州における装飾ある古墳」

⑭最近熊本県宇土市で宇土高校考古学部によつて発見された。線刻の自由画風の表現で船を描いてゐる。

⑮増田精一「馬具」日本の考古学5所収

⑯田辺哲夫氏が調査された熊本県玉名市小路古墳は馬具のうち鞍橋だけをおさめていた。前掲書で増田氏が指摘された茨城県三昧塚古墳の例は、このような観点からも考えられる。

⑰後藤守一「日本歴史考古学」

⑱熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第四冊所収

⑲原口長之「臼塚古墳調査報告」

（附）調査日誌

七月二〇日

晴天 一七時、関係者植木町山東小学校に集合、宿営についての諸準備を終了し、ついで現地の古墳群を視察、一九時、調査員会議を開き、一応の担当を次のようにきめた。

測量班は植木町役場土木課、相良武氏の援助をうけて石川山の立地地形を測量する。

第一、二号墳、田辺。第三号墳、原口。第四号墳、隈。第五号墳、平岡。第六号墳、桑原。第七、第八、第九号墳、緒方。

七月二一日

晴天 一〇時三〇分より現地において植木町教育委員会 畠山正主事の司会によつて古墳祭と結団式を挙行。祭事のあと調査団長県社会教育

石川山古墳群調査報告

課長赤池元則 植木町長境米蔵氏の挨拶、調査員原口長により調査の意義ならびに調査上の諸注意 県社会教育課文化財係長松田安雄氏より調査団の組織についての説明があった。終つて一一時五〇分より調査開始。測量班の相良は第二号墳上にトランシットをたて調査地域の測量をはじめ同時に第三、四、五号墳の墳形実測にかかった。

第四号墳。墳丘南側の天井部近くに石室の破壊口があつて、そこから石室内におりられる状態にあった。石室内には多量の堆土があるが玄室美門の位置は確認できた。玄室の排土作業をはじめた。玄室内より「政和通宝」などの錢貨を発見。

第五号墳 墳頂に石室天井石らしい巨石が露出し墳丘南側に破壊口があるがせまくて内部に入れず、内部の状態はわからない。墳形測量後墳頂に、ほぼ南北の方向のトレーンチを入れる。石川部落より中食、西瓜の差入れがあった。

七月二二日 夜明けより雨が激しく降り出したが、八時過ぎから快晴となりかえって耐え難いまでの暑さとなつた。

測量班、地形測量続行。

第三号墳 石室天井部が破壊されて開口し破壊口から石室内部の状態が明瞭に看取される。室内への出入も容易である。室内には堆積土があるが厚くはないようである。堆土の表面に焚火のあとなどがある。墳形測量を実施する。

第四号墳 昨日に続いて玄室の排土作業。玄室堆土から糸切、須恵器片、人骨を検出した。人骨の一部は焼けている。これらの含まれる層は砂質を帶びて一つのベースを形成している。恐らく昨日発見した「政和通宝」の埋納と同時期に人骨が埋葬されたものではないかとおもわれた

(隈)

第五号墳 昨日に続いて墳丘北側の掘開を続行。石室の石積みの状態を知ることができた。墳丘南裾を掘開して美道部を確認、この古墳が美道部の長い石室をもつものであることがわかつた。石積が破壊されて用材の落ち込みが多い。植木町古閑 高木博敏氏から、パン、デュースの差入れがあった。

七月二三日

晴天 凌ぎがたい暑さである。

測量班 地形測量続行。

第三号墳 玄室の排土作業にかかる。美道が通じないので排土の運搬に困難した。玄室東壁寄りの堆土の中から鉄片を一個発見。

第四号墳 玄室の排土作業進む。中世期から近世期にかけて寄せ墓的性格が強かつたらしく、室内堆土中から人骨出土五ヶ所五輪塔の空、風輪の部分三個、銅錢三枚（洪武通宝、他は銘文不明）糸切底、釘が出た。一五時すぎより緒方班の援助をうけて羨道部の掘開を開始した。

第五号墳 午前中羨道上面の平面図、断面図作製。午後羨門部掘開、まず羨門部への落石を退け一応羨門を確認し羨道の排土にかかり一五時まで排土をほとんど終った。

七月二四日

曇のち晴 午前中一時はうす曇りとなり雨さえ落ちはじめた。暑さ凌ぎにかえつてよからうと思つていたところ一一時ごろからは、カラリと晴れて非常にむし暑い天氣となつた。

測量班 地形測量続行。

第三号墳 羨道部の掘開にかかる。笹の根が縦横に張つて開鋤鍬でなくては手がつけられない。しかし遂に一四時ごろには羨道部の開通に成功。一方玄室内の厚さ約三〇釐の堆土の排除も終了。一三時三〇分玄室床面図の実測にかかつたが終らなかつた。

第四号墳 羨道部の排土作業のかたわら羨道部上面の平面図、断面図を作る。熊本大学医学部解剖学教室松野茂博士を招き人骨採取を依頼一二時過ぎに採取を終る。

第五号墳、玄室の排土作業続行。

七月二五日

晴 測量班 地形測量続行

第三号墳 玄室側壁の実測のかたわら前室の排土作業続行。

第四号墳 玄室、前室、羨道部の排土作業続行。一方玄室石屋形内の人骨を実測する。玄室堆土中から多くの須恵器片、五輪塔部分、人骨六体分および3体分、人骨の配列は比較的乱れていた。おそらく一〇数体を寄せ墓のように葬つてあつたように思われる（隈）

前室から須恵器片、糸切底、青磁片、羨道部から糸切底、須恵器片が出た。

第五号墳 終日排土作業、奥壁に添うた堆土中から人骨の頭部と肢骨が出た。青磁器、糸切底があつた。

七月二六日

晴天 暑氣一段と激しく耐えがたいほどである。測量班 地形測量続行。

第二号墳 墳形測量開始

第三号墳 終日石室実測作業、墳形測量終了。

第四号墳 排土作業を能率化するためベルトコンベアを借りて来たが部品が不完全で、機能を発揮しなかった。ベースより約一〇粁のところまで排土。玄室から須恵器片多数、土師器片数片、羨道部から須恵器片多数を得た。

第五号墳 羨道部実測、玄室堆土の排除中奥壁附近より藤原鏡とその下に鏡面に接して横型木製櫛が発見された。大石のおちこみがあつて出土がすすまない。

第八号墳 わずかに盛土があつて中央部分が陥没している。南北に五〇粁幅のトレンチを入れる。約一米の深さに掘開した。丹塗の石材片が出土。箱式石棺の破片のようである。(上妻)

第九号墳 墳形ははつきりしない。南北に五〇粁の幅のトレンチを南北の方向に二本いれる。丹塗の石材破片が発見されたが遺構は確認できなかつた。見学に来られた村上恵氏の話では約三〇年前に、発掘され真赤な色をしていたのを覚えていたのを覚えていたのであった。話の様子から判断すると箱式石棺であつたらしい。但しそれが九号墳であつたかどうかはつきしないようであった。第七、八、九号墳のどれかであろう。(桑原)

七月二七日

晴 測量班 地形測量続行。

第一号墳 墳形測量続行。

第三号墳 石室関係の実測を全部終了した。

第四号墳 排土作業のためのベルトコンベアが一七時ごろになつてやっと動き出した。玄室及び前室の西側壁の実測図が終つた。羨道部の排土作業がすすまねばこれ以上仕事が進まない状況にある。

第六号墳 低いしるしばかりのマウンドに南北の方向にトレンチを入れた。三〇粁位堀り下げた所から丹塗のある石材が出た。午後から作業にかかつたので仕事は終了せず明日に持ちこすことになった。

第七号墳 申しわけばかりのマウンドをもつて中央部に陥没がある。そこに長さ一米五〇粁、幅五〇粁、深さ一米のトレンチを入れたが破碎

された石棺の残材が七個みつかっただけであった。

七月二八日

晴 第二号墳 墳形測量

第四号墳 前室、玄室の床面露出実測作業を行なう。本日はベルトコンベアが調子よく動きだしたので羨道部の排土作業が進捗した。玄室床面に、石屋形の破損部の石材とみられるもの、須恵器、土師器、糸切底などが散乱している。石屋形の破壊はかなり古く糸切底の時期ではないかと思われる。（隈）

前室眉石に壁画らしいものがある。

第五号墳 終日石室実測作業

第六号墳 挖開作業をつづけていくうちに石室の存在が判明した。完全な破壊墳であると考えていたところ、側壁が残存していることがわかつた。

七月二九日

晴 猛暑続く。

第二号墳 墳形測量

第四号墳 眉石の線刻画の拓と石室実測をつづける。

第五号墳 実測完了

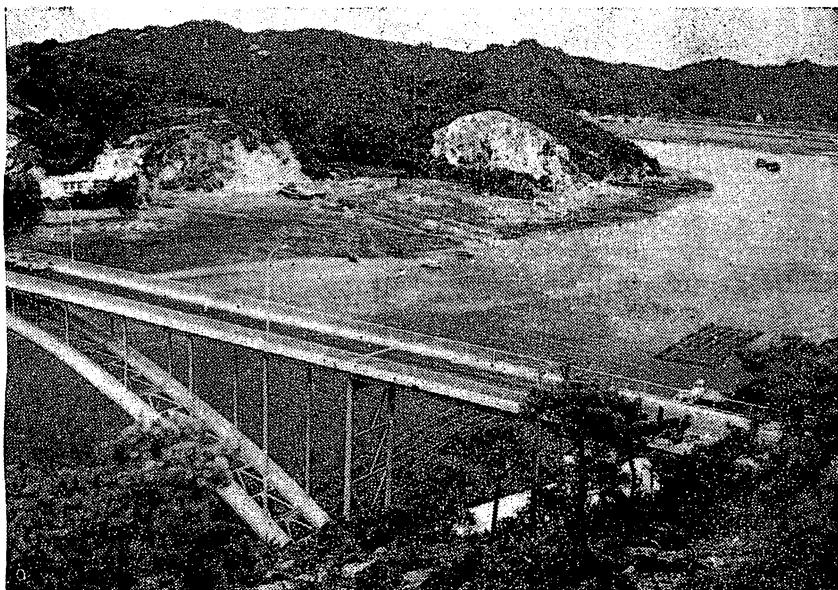
第六号墳 石室内に陥没している土砂の排土を行う。作業が進むにつれて石室の全貌があらわれた。床面の精密発掘にかかる。鉄鎌、金環などが出しあはじめる。

七月三〇日

晴 第六号墳 午前中精密発掘作業続行と同時に石室実測を行う。各墳とも実測図の再点検と遺物の整理などにあたる。一三時三〇分解団式

を行い、酷暑のさなか一〇日間の調査を終了した。（原口長之）

前島貝塚



貝塚

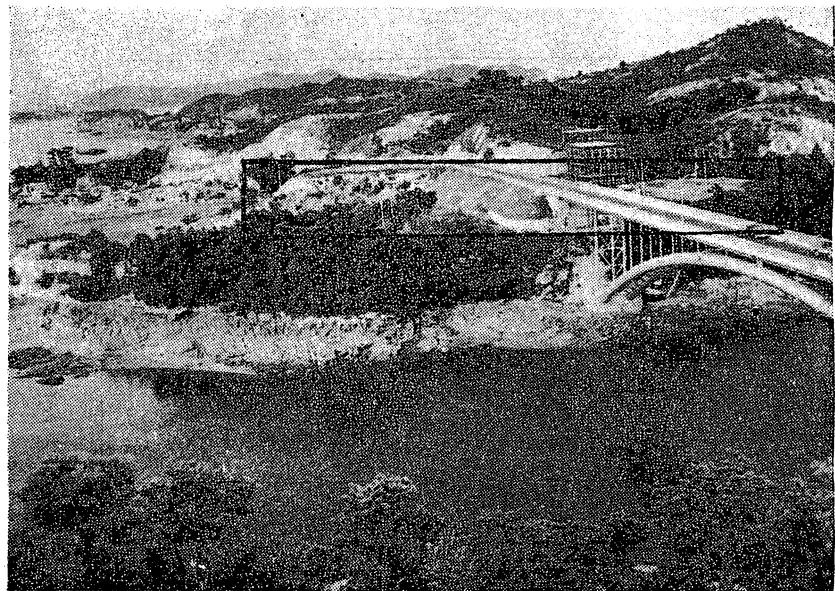
一 遺跡の地理的位置

本遺跡は天草上島の北岸、松島町合津港の沖あい約三〇〇米にある、前島の西南端に位する繩文式文化期の貝塚である。厳密にいうと前島の西側を南北に走る天草五橋自動車道路第五橋のたもとにあり、松島町大字合津字松島六〇六七番地から六〇八六番地にわたる。遺跡の東方約六米の崖下には熊本大学臨海実験所があり、東北方約八米に湾入する谷にそって、横穴式石室墳・梅木殿（熊本県遺跡番号二一九〇、梅殿塚古墳）がある。貝塚は海拔十二米の比較的平坦部にあり、天草五橋自動車道路によつて東西両区に分断されている。現地は最近まで畠であったが、観光業者に買取、借用され一部は荒地化している。

前島の東北方約三〇〇米にはカルワ島（無人島）があり、その北岸一帯の海面下では押型文土器が出土し、南岸の海面下にも青磁や須恵器破片が採集される。また前島の西方約四〇〇米にある仏島（無人島）にも、海面下約一・五〇米に押型文土器や須恵器が出土する。

二 經過概要

本遺跡はすでに一部の郷土史家には知られており、昭和三十年頃坂本經堯氏の一行が踏査されたことがあり、その頃チャート製の有柄打製石鏃が採集され



島前

注目されたことがある。当時はまだ有望な貝層も残っていたが、今回の調査時にはすでに懐滅状態であった。たまたまこの貝塚は昭和三十八年からはじまつた天草架橋工事による道路によつて、中心部が貫通され、東西両区に分断されてしまつた。これに付帶して架橋道路の東側にレストハウスがつくられ、加うるに昭和四十一年天皇皇后両陛下の御幸にさいして、熊本大学臨海実験所に立寄られることになり、架橋道路から実験所にいたる取付道路がつくられることになつた。そのため貝塚の中心部が失なわれることになり、緊急調査をおこなつた。調査は昭和四十一年八月十六日から同月二十五日にわたつて実施した。その調査は次のようなメンバーによつて実施した。

三遺跡

すでにのべた通り貝塚は天草架橋道路によつて、東西一地区に分断されてしまつた。東地区ではレストハウスの前庭より、熊本大学臨海実験所の裏手台上まで約八〇平方米にわたつて貝塚が散布する。貝殻はレストハウスから東側の斜面にかけて濃密に分布するが、いずれもこまかく破碎され、それが耕土になつている。(第一～第七レンチ) 破碎混土貝層の深さ約一〇～一〇粂で地山にいたり、遺物は地表面に露出し、すでに湮滅状態にある。レストハウスから北方にかけて傾斜する一帯には、破碎混貝土層がひろがり、わずかに遺物を包含するが、それも谷にむかつて流れたものであろう。(第八～十二レンチ) とくに第八レンチの地表下十五粂に条痕文ある縄文式土器片を検出したほか、第九レンチの耕土内に石鏃一点、第

一〇トレンチの深さ約一〇厘米に石鏃一点、第十一トレンチの地表下約三〇厘米に須恵器一片および条痕ある粗製土器一片を検出した。これらによつてわかるように、貝塚は完全に消滅状態にある。

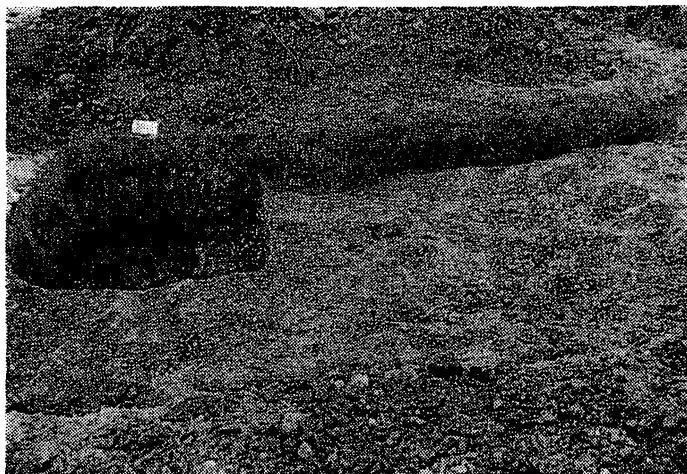
同様なことは西地区についてもいえる。西地区では架橋道路の保護網線から西にかけて、約五〇平方メートルにわたつて破碎貝殻の分布をみると、第十三と十五トレンチ内の所見は東地区と何ら変りなかった。第十四トレンチ内から黒耀石の石鏃、小破片を検出したがこれも表面採集同然の出土状態であった。おそらく本来の貝層は架橋道路の下に埋没しているものと思うが、今は確めようがない。各トレンチ断面にあらわれた土層、および出土遺物を表示すれば、次のとくなる。

トレンチ番号	面 積	所 見
第1 トレンチ	2.00m×3.70m	耕土は破碎貝を混じた有機土で地表下20cmで赤褐色の地山となる。遺物なし
第2 トレンチ	2.00m×3.80m	耕土は第1トレンチと同じ、深さ10cmで地山にいたる。遺物なし
第3 トレンチ	2.00m×1.40m	耕土の深さ13cmで地山にいたる。遺物なし
第4 トレンチ	2.00m×1.60m	耕土の深さ16cmで地山にいたる。遺物なし
第5 トレンチ	2.00m×8.00m	地表下15cmで地山にいたるこのトレンチには貝殻が殆んどなく、遺物もない。
第6 トレンチ	2.00m×2.50m	深さ10cmで地山にいたる。貝は耕土の上面に散布する。遺物なし
第7 トレンチ	2.00m×4.00m	地表下20cmで灰白色砂層、この層は本遺跡の基盤をなすらしく。地山の下に位する。
第8 トレンチ	2.00m×4.15m	地表下15cmで暗赤褐色土の無遺物層にいたる。耕土の下底に条痕文土器片出土。
第9 トレンチ	2.00m×4.00m	地表下35cmで暗赤褐色の地上となる。耕土内にサヌカイト製石鏃1点出土。
第10 トレンチ	2.00m×4.00m	地表下23cmで暗赤褐色土、耕土は混貝土層、耕土内より石鏃検出。
第11 トレンチ	2.00m×4.00m	地表下20cmで暗褐色土にいたり須恵器や条痕文（条痕文）を包含する。地山までの深さ不明。
第12 トレンチ	2.00m×1.50m	地表下10cmで地山、遺物なし。
第13 トレンチ	2.00m×7.00m	地表下14cmで赤褐色粘質の地山にいたる。遺物なし
第14 トレンチ	2.00m×4.00m	地表下の状態は第13トレンチに同じ。黒耀石、石鏃、石破片等検出。
第15 トレンチ	2.00m×4.00m	第13トレンチと同じ、遺物なし。

以上のはか、貝塚東北方の谷に八箇所試掘拠を掘つたが、いずれも高い部位から流入した近代の堆積土層であった。

四 遺 物

本遺跡出土遺物は、從来表面採取されていた石鏃三片と土器片、今回採取した石鏃三点、土器片、発掘によつて出土した石鏃三点、繩文土器片数片、須恵器一片からなる。



これらのうち繩文式土器片はいずれも荒いアルカ属の貝殻で横走する条痕を施したもので、焼成わるく、器形も形式も明らかでない。胎土の状態からみて早期の土器とは思えないで、おそらく後期の所産ではなかろうか。何ぶん小量の遺物では判定困難である。須恵器の残缺は古墳時代終末期に近い壺の破片と推定される。石鏃は細分すると四種にわけられる。第一類はチャート製有柄石鏃で、本遺跡から採取されたことは明らかである。九州における有柄石鏃の出土例は珍らしく、從来の知見では三箇以上の一例をきかない。第二類は無柄長三角形で、頂部がわずかに抉りこみも多い例である。第三類は無柄長三角形で頂部が深くU字形に抉りこむ。第四類は無柄正三角を呈し、頂部がV字形に抉りこむ。これらの石鏃には時間的な前後関係があると思うが、併出土器との関係が明らかでない。その他石器の材料と思われる石くずが若干出土したほか、梅木殿古墳の石室から半月形を呈した双角状の打製石器一点が採取された。このような石器は天草郡五和町通詞沖ノ原貝塚において、繩文式土器の中期末に比定される出水式土器にともなつて多量に出土したことがある。また、長崎県南高来郡口之津町三軒屋貝塚や同加津佐町長瀬貝塚では弥生式土器(後期)とともに十数個出土したことが知られ、熊本県下益城郡松橋町大野貝塚では繩文晚期の御領式土器の層から検出された。しかし同郡城南町田貝塚では弥生式後期の土器とともに採集され、上益城郡嘉島村下六嘉宮ノ前では弥生式中期の土器を出土するが、同じ石器を採取している。このような石器は岩礁性の貝を産する地帯の貝塚に多く、あるいは貝殻の処理法と関係があるのでなかろうか。

五 自 然 遺 物

本遺跡出土の自然遺物は未整理のため一概にいえないが、発掘時の所見ではカキ、ハイガイ

前島貝塚

を主とし、他にコシタカガングラ、ウミニナ、フトヘナタリなどがめだつていた。動物ではシカ、イノシシの小骨片を採取したにすぎない。

六 小 結

以上のべた通り、本遺跡は、天草の離島地帯における数少ない縄文式貝塚であるが、すでに調査以前において、遺跡の肝要な部分は壊滅状態にあることがわかつた。そして貝塚の時期や文化内容については、出土遺物があまりにも少なく、十五箇所のトレンチと八箇所の試掘場を掘開したにもかかわらず、予期した成果を得られなかつた。しかし本遺跡において採取された有柄石鏃一点は西日本に稀有な遺物だけに、今後の類例探索と伴出時期の究明が期待される。

(文責 乙益重隆)

梅殿塚古墳

三島格



梅殿塚古墳

本墳は、前島貝塚の北東熊本大学臨海実験所に通ずる小径の傍にある。本墳についての記載は、本田次郎氏註1（一九三五年）によるそれが、比較的古いものと思うが、当時においても調査はされず、単に「梅殿塚」とのみ記されている。その後未調査のまま現在にいたったと思われるが、崩壊寸前であり、今後調査をする機会もあまりないのであるまいかと考えられたので、略測と撮影をおこなつた。

現況（写真1）は次のとくである。羨門部では、高さ約九十厘米の側壁とその上に架せられた、長径一・六米厚さ三十・四十厘米の眉石を認め、その上に小祠をまつる。羨門には土砂が流入しており、床面を知ることはできない。なお、羨門には一枚の切石が置かれているが、古墳にともなうものではあるまいと考える。石室部においては、天井石は全くなく、奥壁の一部と西側壁二・三を認めるだけである。石室内には土砂が充满している。時間の制約上、床面を露出することはできなかつたので、石室・羨門などの計測値はあきらかでないが、玄室は長方形に近く（長辺約一・六米？）その短側の中央に巾のせまい（七十厘米）羨門が、ほぼ南に開口する。奥壁から羨門まで約三米である。封土は現存しないが、周囲の状況から直径四・五米高さ一米余の盛土があつたと考えたい。

遺物については、床ざらえをおこなわなかつたので、期待されなかつ

梅殿塚古墳

たが、流入土の中から、前島貝塚に属する縄文時代石器とともに須恵器破片若干が得られた。この須恵器は、過去の乱掘などにより散乱したものが、再投入されたものであろう。すべて破片で明瞭な器形を示すものはない。(図1)

梅殿塚古墳については、上記のことく判明しない点が多いが、これを要約するならば、ほぼ南に開口する小形の、しかも申し訳程度の美門をもつ、横穴式石室墳であるといえる。時期も六世紀末あるいは七世紀に下降するものと考えられる。このような小形古墳は、天草のみの現象ではないが、天草においてもかなり多く見られる。

近くの例では、永浦島などの古墳をあげることができる。またこれらの小形古墳は、副葬品なども貧弱な場合が多い。天草諸島における後期・末期の古墳をとらえる場合、島嶼ごとに一群をなす数基あるいは十数基の古墳は、おそらく家父長的な小家族の家族墓で、各世代の戸主を中心にして逐次埋葬されたと考えられるが、その中にあって、石室構造上あるいは遺物などの点において、盟主的な古墳の存在も指摘できる。前島においては、姫殿塚古墳のみで他には古墳は認められない。

註1 本田次郎『天草の史蹟』一九三五年、

今津村

前島古墳 字合津前島の東部谷に梅殿塚

註2 大矢野島・千束藏々島および天草上島にはさまれた、狭い海域に浮ぶ島々即ち樋合・永浦・前島・小島および沿海の岬には古墳がすこぶる多い。この内樋合・永浦島に対して、昭和三一年八月坂本經堯氏を中心として、松崎盛之・松岡史・志佐輝彦各氏及び三島らによる調査が

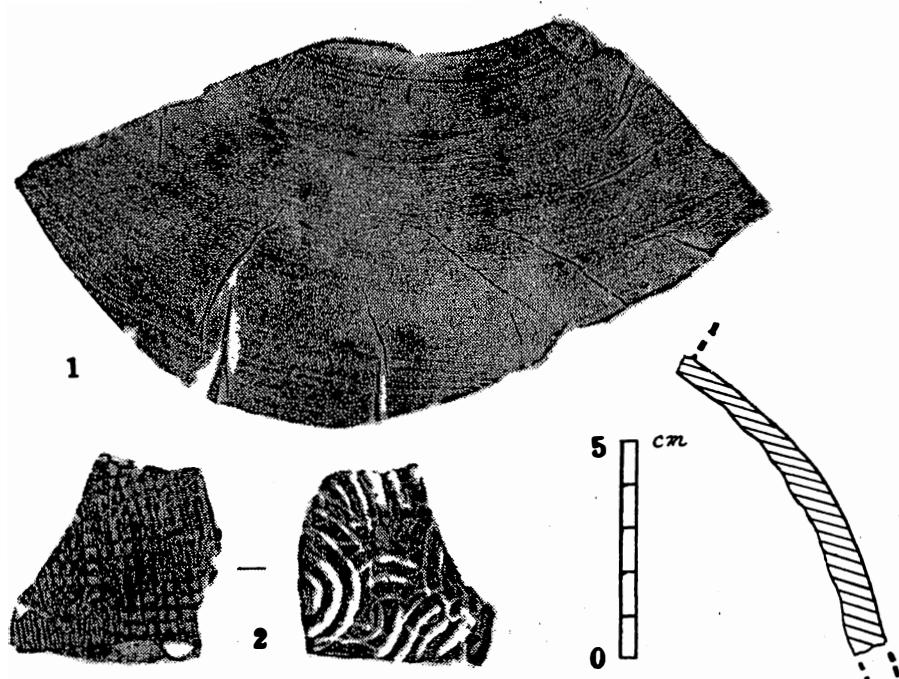


図1 梅殿塚の須恵器 1は壺形土器

実施され、その成果については坂本氏の見解による「天草の古代」熊本史学十一九五六年がある。

註³ 同島所在のカミノハナ一号は、同島十基の中の盟主的な古墳と考える。未発掘であるが、横穴式石室で円筒埴輪・人物埴輪（腕の破片。三島格）「熊本の歴史」1、熊日社、一九五六年）などをもつ。

昭和四十三年三月二十日印刷
昭和四十三年三月三十日發行

熊本県文化財調査報告 第九集

發行所 熊本県教育委員会
印刷所 熊本市九品寺三丁目六ノ三二
有限公司 佐伯印刷所

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第9集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県文化財調査報告 第9集

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日